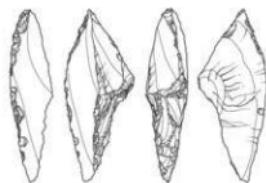


# 常磐自動車道遺跡調査報告73

大谷上ノ原遺跡（5次調査）

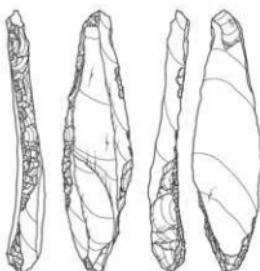


2017年

福島県教育委員会  
公益財團法人福島県文化振興財團  
東日本高速道路株式会社

# 常磐自動車道遺跡調査報告73

おおやうえの はら  
大谷上ノ原遺跡（5次調査）



## 序 文

常磐自動車道ならぬスマートインターチェンジの建設は、本県浜通り地方の東日本大震災からの復興に寄与し、地域住民の帰還を促進する取組みとして大きな期待が寄せられています。

埋蔵文化財は、それぞれの地域の歴史と文化に根ざした歴史的遺産であると同時に、我が国の歴史・文化等の正しい理解と、将来の文化的向上発展の基礎をなすものです。県教育委員会では、双葉郡楢葉町の常磐自動車道ならぬスマートインターチェンジ建設計画地内について、埋蔵文化財の保存のための協議を行い、現状での保存が困難な箇所について記録保存のための発掘調査を実施することとしました。

本報告書は、平成28年度に発掘調査を実施した、双葉郡楢葉町大字大谷字上ノ原・山根に所在する大谷上ノ原遺跡の調査結果をまとめたものです。今回の調査では、後期旧石器時代後半期に属する旧石器が出土しました。

この報告書が、文化財に対する県民の皆さんの理解を深めるとともに、地域の歴史を解説するために広く活用していただける資料となれば幸いです。

最後に、発掘調査の実施に当たり、御協力いただいた東日本高速道路株式会社、楢葉町教育委員会、公益財団法人福島県文化振興財団をはじめとする関係機関及び関係各位に対し、深く感謝の意を表します。

平成29年3月

福島県教育委員会

教育長 鈴木淳一

## あいさつ

公益財団法人福島県文化振興財団では、福島県教育委員会からの委託により、県内の大规模な開発に先立ち、開発対象地域内に所在する埋蔵文化財の調査を実施しております。浜通り地方における、常磐自動車道ならスマートインターチェンジ建設に関連する遺跡の発掘調査も、こうした事業の一つです。

ならスマートインターチェンジの設置は、東日本大震災後、県内外に多くの避難住民を抱える双葉郡楢葉町において、復興の一役を担うものとして期待をされております。このたび、当財団では、この開発対象地内に所在する大谷上ノ原遺跡について、平成28年より本発掘調査を実施することとなりました。

本報告書は、平成28年度に本発掘調査を実施した大谷上ノ原遺跡の5次調査の成果をまとめたものです。今回の調査では、後期旧石器時代後半期の石器群が発見されました。これらのなかには、ナイフ形石器や石刃など、当時の生活をしのぶことのできる貴重な資料も含まれております。

本報告書の成果が、地域文化の理解を広め、郷土の歴史研究の基礎資料として、広く活用していただければ幸いに存じます。さらには、本事業が福島県の復興の足掛かりとなるように祈念いたします。

最後に、この調査に御協力いただきました関係諸機関並びに地域住民の皆様に、深く感謝を申し上げますとともに、当財団の事業の推進につきまして、今後とも一層の御理解と御協力を賜りますようお願い申し上げます。

平成29年3月

公益財団法人 福島県文化振興財団  
理事長 杉 昭 重

## 緒　　言

- 1 本書は、平成28年度に実施した常磐自動車道(ならはスマートインターチェンジ)遺跡調査の本発掘調査報告である。
- 2 本書には、福島県双葉郡楢葉町に所在する大谷上ノ原遺跡(5次調査)の調査成果を収録した。  
大谷上ノ原遺跡　福島県双葉郡楢葉町大字大谷字上ノ原・山根　埋蔵文化財番号：54200089
- 3 本事業は、福島県教育委員会が東日本高速道路株式会社の委託により実施し、調査・報告にかかる費用は東日本高速道路株式会社が負担した。
- 4 福島県教育委員会では、本発掘調査を公益財団法人福島県文化振興財団に委託して実施した。
- 5 公益財団法人福島県文化振興財団では、遺跡調査部調査課の次の職員を配し調査にあたった。  
専門文化財主査　門脇　秀典　　文化財主事　佐藤　俊  
文化財主事　山田　和史（公益財団法人東京都スポーツ文化事業団より出向）  
臨時に、専門文化財主査　谷中　隆（公益財団法人とちぎ未来づくり財団より出向）、  
文化財主査　植松　暁彦（公益財団法人山形県埋蔵文化財センターより出向）が参加した。
- 6 本書の執筆は、轟田克史（福島県教育庁文化財課）が第1章第1節、山田が第1章第3節、佐藤が第2章第2節の3を執筆した。この他は、門脇が執筆した。
- 7 本書に収録した遺跡の調査記録及び出土資料は、福島県教育委員会が保管している。
- 8 本発掘調査から本報告書を作成するまでに、次の諸氏・機関からのご指導やご協力をいただいた。  
楢葉町教育委員会　　楢葉町建設課　　広野町教育委員会  
公益財団法人東京都スポーツ文化事業団  
東日本高速道路株式会社東北支社いわき管理事務所  
東日本高速道路株式会社東北支社いわき工事事務所  
柳田俊雄（東北大学文学部）　　鹿又喜隆（東北大学文学部）

## 用 例

- 1 本書における遺構図版の用例は、以下のとおりである。
  - (1) 方 位 図中の方位は真北を示す。方位記号がないものは、本書の天を真北とする。
  - (2) 縮 尺 各挿図中に縮小率を示した。
  - (3) ケ バ 遺構内の傾斜部は「↑↑」、相対的に緩傾斜の部分には「↓」、後世の擾乱部や人為的な削土部は「⤒」の記号で表現した。
  - (4) 土 層 遺構外堆積土は大文字のLとローマ数字で、遺構内堆積土は小文字のℓと算用数字で表記した。  
(例) 遺構外自然堆積土…L I・L II 遺構内堆積土…ℓ 1・ℓ 2
  - (5) 標 高 挿図中に示した標高は、海拔高度(T.P.)を示す。
  - (6) 遺構番号 当該遺構は正式名称、その他の遺構は記号化した略称で記載した。
  - (7) 土 色 土層注記に使用した土色は土色計[第一合成株式会社製S C R - 1]に基づくが、補助的に小山正忠・竹原秀雄編著、農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版標準土色帖』を用いた。
- 2 本書における遺物図版の用例は、以下のとおりである。
  - (1) 縮 尺 各挿図中に縮小率を示した。
  - (2) 遺物番号 挿図ごとに通し番号を付し、本文中では下記のように省略した。  
(例) 図1の2番の遺物…図1-2  
遺物写真中で遺物に付した番号は、挿図中の遺物番号と一致する。  
(例) 1-2…図1-2
  - (3) 石器計測値 表2の凡例に示す。
- 3 本書で使用した略号は、次のとおりである。

橋 葉 町…N H	大谷上ノ原遺跡…O Y U H	石製遺物集中部(ブロック)…B
土 坑…S K	炭 化 物…C	始良Tn火山灰…A T
グリッド…G	遺構外堆積土…L	遺構内堆積土…ℓ
- 4 引用・参考文献は執筆者の敬称を略し、各章の末尾に掲載した。

# 目 次

## 第1章 調査経過と周辺の環境

第1節 調査に至る経緯	1
1. 事業の概要	1
2. これまでの埋蔵文化財調査	2
3. ならはスマートＩＣに関わる埋蔵文化財調査	3
第2節 遺跡周辺の環境	6
1. 地理的環境	6
2. 河床堆積物と段丘堆積物	8
3. 周辺の遺跡と歴史的環境	10

## 第2章 調査概要と成果

第1節 調査概要	15
1. 位置と地形	15
2. 調査の経過	15
3. 調査の方法	17
4. 基本土層	19
第2節 遺構と遺物	23
1. 調査区の概要	23
2. 旧石器時代の遺物と出土状況	23
3. 繩文時代以降の遺構	32
4. 遺構外出土遺物	36

第3章 まとめ	37
---------	----

写真図版	43
------	----

報告書抄録	57
-------	----

## 挿図・表・写真目次

### [挿図]

図1 常磐自動車道位置図	1	図13 遺構配置図	24
図2 常磐自動車道遺跡位置図	2	図14 旧石器出土分布図	25
図3 大谷上ノ原遺跡の範囲	3	図15 旧石器出土状況模式柱状図・断面図	26
図4 ならはスマートIC工事計画図	4	図16 6号ブロック出土旧石器(1)	27
図5 調査区位置図	5	図17 6号ブロック出土旧石器(2)	28
図6 梶葉町周辺の地質・地形分類図	7	図18 ブロック外出土旧石器	29
図7 梶葉町の河川種類	9	図19 109~113号土坑	33
図8 梶葉町周辺の遺跡	12	図20 114~116号土坑	35
図9 グリッド配置図	18	図21 遺構外出土石器	36
図10 基本土層断面図(1)	20	図22 1~5次調査旧石器出土分布図	38
図11 基本土層断面図(2)	21	図23 大谷上ノ原遺跡旧石器集成図	39
図12 基本土層柱状図	22	図24 1~5次調査遺構配置図	41

### [表]

表1 梶葉町の遺跡一覧	13	表3 炭化物法量表	30
表2 旧石器観察表	30		

### [写真]

1 遺跡遠景	45	9 6号ブロック全景・石器出土状況(1)	51
2 遺跡遠景	45	10 6号ブロック石器出土状況(2)	52
3 遺跡遠景	46	11 ブロック外石器出土状況	52
4 5次調査区全景	47	12 109~112号土坑	53
5 5次調査区全景	47	13 113~116号土坑	54
6 基本土層(1)	48	14 6号ブロック出土旧石器	55
7 基本土層(2)	49	15 ブロック外出土旧石器	56
8 6号ブロック全景	50		

# 第1章 調査経過と周辺の環境

## 第1節 調査に至る経緯

### 1. 事業の概要

常磐自動車道は、埼玉県三郷市の三郷インターチェンジ(以下 I C と略す)を起点とし、千葉県から茨城県、そして福島県の浜通り地方を通って、宮城県亘理郡亘理町の亘理 I C を終点とする総延長300.4kmの高速自動車国道である。この内、三郷 I C ～いわき市のいわき中央 I C までは昭和63年3月に供用が開始され、平成11年3月にはいわき中央 I C ～いわき四倉 I C まで、平成14年3月にはいわき四倉 I C ～広野 I C までが開通した。その後、福島県内では平成16年4月には広野 I C ～常磐富岡 I C 間、平成24年4月には南相馬 I C ～相馬 I C 間、平成26年12月には相馬 I C ～宮城県山元 I C 間と浪江 I C ～南相馬 I C 間がそれぞれ開通した。最後に平成27年3月には常磐富岡 I C ～浪江 I C 間が完成し、これにより全線が開通の運びとなった。

また、広野 I C ～常磐富岡 I C 間で整備が進められていた、ならはパーキングエリア(以下 P A と略す)は、当初、平成24年の開業を目指して建設が進められていたが、東日本大震災及び福島第一原子力発電所事故に伴う避難指示区域に指定されたため、建設は中断していた。平成24年から復旧工事を開始し、平成27年3月の全線開通に合わせ、開業した。

東日本大震災以前より福島県及び楢葉町は、ならは P A 接続型のスマート I C の設置する方向で検討を進めていた。東日本大震災後、楢葉町の復興計画を策定する段階でならはスマート I C (当時は仮称)の整備が重要事業に位置付けられることとなった。その後、平成25年9月に、国や東日

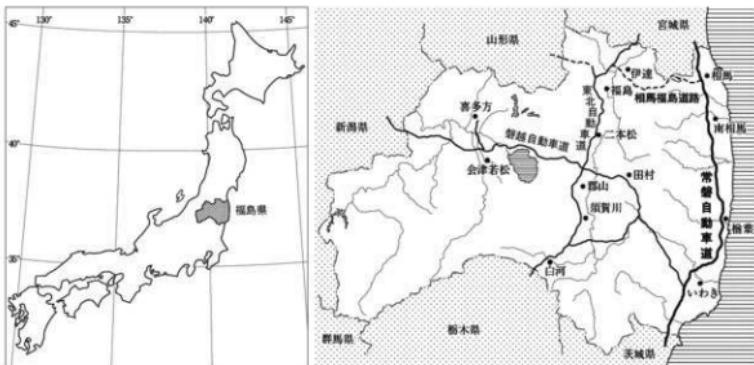


図1 常磐自動車道位置図

本高速道路株式会社、県、町の職員で構成された、ならぬスマートＩＣの実現に向けた第1回の勉強会を開催した。その後の検討を経て、平成26年8月に国土交通省から連結許可の運びとなり、現在は、平成30年の供用開始を目指し、東日本高速道路株式会社東北支社いわき工事事務所(以下、ネクスコという)が計画の主体となって事業が進められている。

## 2. これまでの埋蔵文化財調査

常磐自動車道の建設に関わる埋蔵文化財の調査は、昭和59年度から本発掘調査が開始され、平成26年度までに124遺跡、調査面積809,627m<sup>2</sup>の本発掘調査が完了している。この成果は「常磐自動車道遺跡調査報告」全72冊にまとめられている。

ならばP.A.及びそれに接する路線箇所に関わる埋蔵文化財の調査は、平成6年に福島県教育委員会(以下、県教委という)が調査主体となった分布調査で、縄文土器等が採集されたことから、「大谷上ノ原遺跡」として埋蔵文化財包蔵地台帳に登録したことに端を発する。その後、平成9・10年の確認調査で、台地の大部分の44,000m<sup>2</sup>が要保存範囲として確定した。

平成11年度には、大谷上ノ原遺跡の要保存範囲内の、調査条件の整った13,000m<sup>2</sup>について本発掘調査(1次調査)を実施し、その成果を『常磐自動車道遺跡調査報告26』にまとめた。続く平成12年度は側道部分を含め、10,600m<sup>2</sup>の本発掘調査(2次調査)を実施し、その成果を『常磐自動車道遺跡調査報告31』にまとめた。平成20・21年度は、ならはPA箇所に関わる8,800m<sup>2</sup>の本発掘調査(3・4次調査)を実施し、その成果を『常磐自動車道遺跡調査報告56・65』にまとめた。

以上の4次にわたる本発掘調査で32,400mにつ



図2 常磐自動車道遺跡位置図  
(大熊・富岡・檜葉・広野町)

いては記録保存が完了し、残る11,600m<sup>2</sup>の箇所(ならはPAと側道とに挟まれた部分)については、平成21年度の時点では未発掘のまま、現状保存と措置された。

なお、県教委は、以上の本発掘調査及び報告書刊行に関わる業務を、公益財団法人福島県文化振興財團(以下、財團という)に委託し、実施してきている。

### 3. ならはスマートICに関する埋蔵文化財調査

ならはスマートICに係る埋蔵文化財調査については、平成26年度から関係機関と協議してきた。

**平成26年度** 5月7日に、県相双建設事務所・県文化財課が協議し、ならはスマートIC建設については、楢葉町から完成を急いでほしい旨の要望があったため、できるだけ埋蔵文化財調査の工程を前倒し実施することとした。翌6月2日に、楢葉町建設課・楢葉町教育委員会・県相双建設事務所・県文化財課が協議し、ならはスマートIC建設の計画を前倒しする方策について打ち合わせた。試掘・確認調査における既存データの活用、協議による本発掘調査回避、県から町への人的支援、試掘・確認調査の早期実施等の方策が提案された。

7月16日に、県相双建設事務所と県文化財課が協議し、試掘・確認調査、本発掘調査は県教委が実施する方向を確認した。本発掘調査は当初、平成27年度に予定するとした。翌8月6日、楢葉町建設課・楢葉町教育委員会・県相双建設事務所・県文化財課が協議し、試掘・確認調査の際は



図3 大谷上ノ原遺跡の範囲



図4 ならはスマートＩＣ工事計画図

幅杭打設が必要であること、平成27年度の本発掘調査のためには平成26年度内に立木補償や伐採等を実施する必要があることを確認した。

10月9日、ネクスコ・県文化財課で協議し、幅杭打設が平成27年9～11月になり、試掘・確認調査はその後に実施する方向を確認した。年が明けた平成27年3月24日に、ネクスコ・檜葉町建設課・檜葉町教育委員会・県文化財課が協議し、用地取得済みの1,700mについて先行して本発掘調査が可能であることを確認した。

平成27年度 9月28日、ネクスコ・檜葉町建設課・檜葉町教育委員会・県文化財課が協議し、ネ

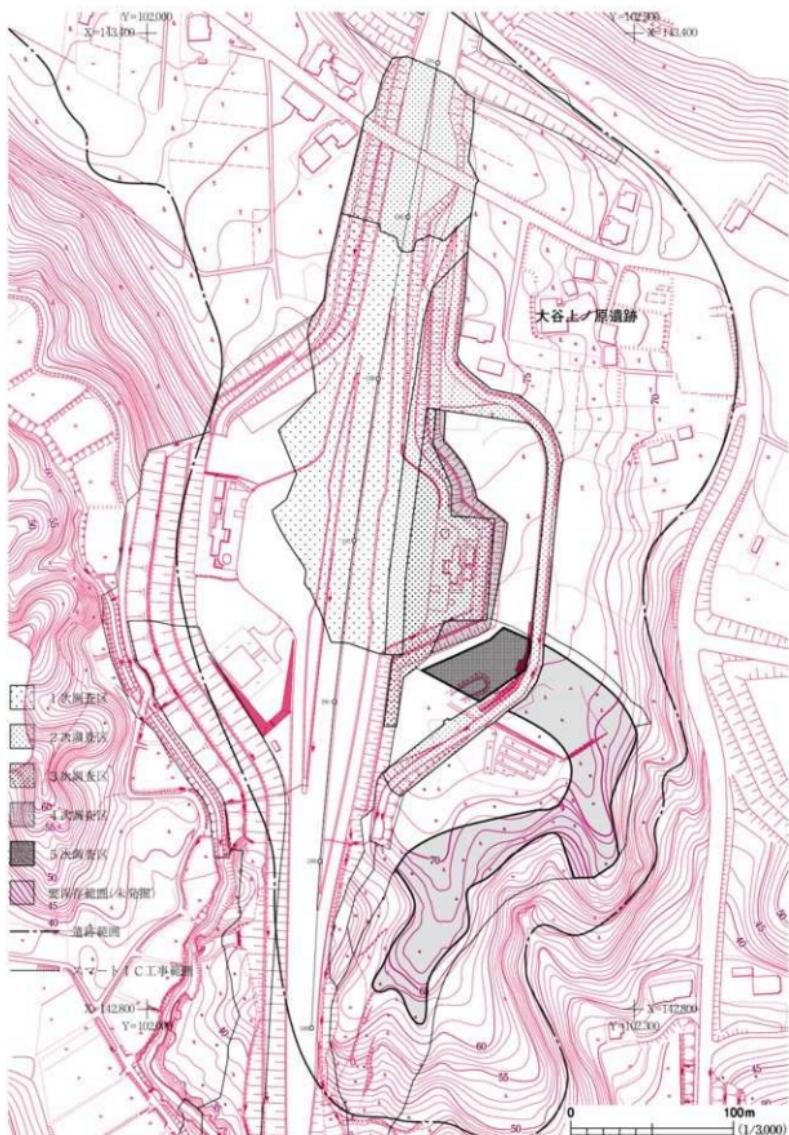


図5 調査区位置図 (1～5次調査)

クスコより試掘・確認調査は平成28年1月から実施可能であるとの見通しが示された。翌10月1日、楢葉町教育委員会・県文化財課が協議し、ならはスマートICに係る試掘・確認調査については、県文化財課による実施が困難であったため、楢葉町が実施し県文化財課が支援することとした。

年が明けた平成28年1月26日から2月19日まで、楢葉町教育委員会が主体となり、県教委が支援して試掘・確認調査を実施した。調査面積は大谷上ノ原遺跡、大谷山根遺跡とその隣接地と合わせて18,000m<sup>2</sup>である。その結果、大谷上ノ原遺跡で竪穴住居跡2軒、土坑6基などが検出されたため、11,000m<sup>2</sup>を要保存とした。

## 第2節 遺跡周辺の環境

### 1. 地理的環境

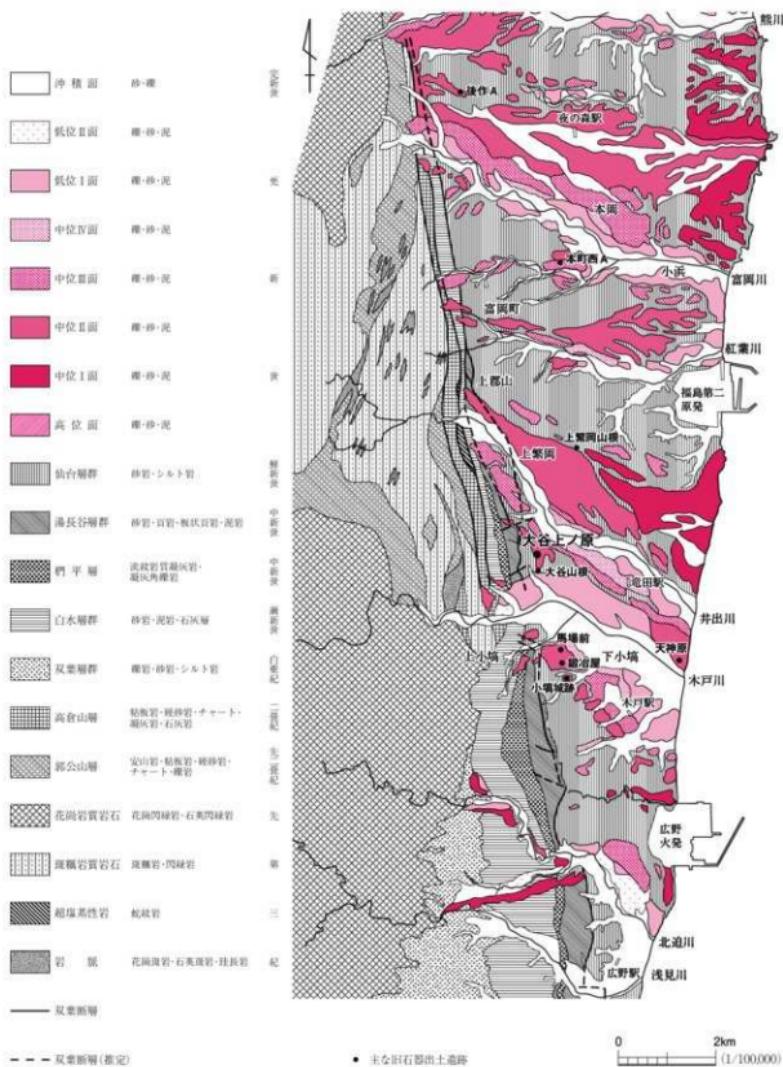
福島県は東北地方南端に位置し、面積は13,782km<sup>2</sup>である。この内、およそ8割は山地で占められ、東部には太平洋に沿って阿武隈高地、中央部には奥羽山脈、西部には越後山脈がせまっている。これららの山地はほぼ南北に走り、県内は太平洋側より「浜通り地方」・「中通り地方」・「会津地方」の3地域に区分される。

大谷上ノ原遺跡は、浜通り地方南部の双葉郡楢葉町に所在する。町の面積は104.2km<sup>2</sup>で、東は太平洋から西は標高400～600mの阿武隈高地にかけて東西に広がった土地をもち、西部の約7割が山地で占められる。低地帯は町の北端で東西の幅が約5kmであるが、南に行くほど狭まって、町の南端では1kmほどになる。これは海岸線がほぼ南北を走るのに対し、阿武隈高地東縁(低地帯西縁)を限る双葉断層の走向がN10°Wを示し、両者が平行しないためである。

楢葉町の地質構造は、浜通り低地帯の西縁を南北方向に走る双葉断層を境として東西で大きく異なっている(図6)。まず断層の西側にあたる阿武隈高地の山間部には、中生代白亜紀の貫入岩の花崗岩類が広く分布している。この阿武隈花崗岩類のなかには、斑頸岩やアブライト、結晶片岩などが散在的に発達する。さらに双葉断層に沿った周辺では、破碎された未変成・弱変成の古生層(高倉山層・郭公山層)が、帯状に発達している。これら古生層の堆積物には、粘板岩・硬砂岩・チャートなどの堆積岩が含まれている。

次の中生代の地層は、楢葉町南端の大坂地区からいわき市北部にかけて広く分布する双葉層群である。この地層からは、フタバスズキリュウ等の化石が多数発見されている。

次に第三紀層の白水・湯長谷・仙台の各層群は、双葉断層の周辺及び東側に帶状に分布している。漸新世に形成された白水層群は、石城層・浅貝層・白坂層からなり、なかでも石城層には常磐炭田の稼行対象としていた石炭層が堆積している。中新世に形成された湯長谷層群は、下位より門平層・五安層・水野谷層・亀ノ尾層・平層の5つの地層で構成される。最下部の門平層(澁層)の堆積物のなかには、石器石材として利用される流紋岩疊が含まれている。この層は、楢葉町山田岡付近では東西幅500mほどの狭長な分布を示すが、いわき市方面に向かうにしたがい分布幅を広げ、いわき



(久保はか1994・鈴木はか1991・鈴木はか1994をもとに作成)

図6 楠葉町周辺の地質・地形分類図

市四倉町付近では東西幅が3kmを超える。また、五安層の堆積物の中にも、礫岩中に流紋岩が含まれていることが指摘されている(根本 1991)。鮮新世に形成された仙台層群は双葉断層東側の丘陵地に広く分布し、第四紀に形成された段丘面の基盤層を形成している。堆積物は半固結のシルト岩・凝灰岩からなり、多くの火山灰層を介在している。

次に地形であるが、楢葉町の中央には木戸川と井出川が東流し、太平洋に注いでいる。両河川の上流部は、阿武隈高地の基盤をなす花崗岩を浸食してV字谷渓谷が形成されている。下流部の両岸には幅0.5~2kmの沖積面及び数段の河岸段丘が発達する。段丘は、標高の高いもの(年代の古いもの)から、高位、中位Ⅰ、中位Ⅱ、中位Ⅲ、中位Ⅳ、低位Ⅰ、低位Ⅱ面と呼ばれている(久保ほか 1994)。この内、楢葉町には主に中位面が発達し、その大部分は隆起扇状地的な山麓河成平坦面を形成している。これら中位段丘面は、更新世後期の最終間氷期(約7~13万年前)の海進・海退に伴って形成されたと考えられている(久保ほか 1994)。

本遺跡は、標高約70mの中位Ⅱ段丘面に立地し、その段丘面の規模は東西幅0.9km、南北幅1kmで、木戸川北岸に分布する段丘面のなかでは比較的規模が大きい。遺跡の北側は、沖積面との比高30mの切り立った段丘崖となっている。この段丘面では、最上位に厚さ約2mのローム質土壌を載せ、その下位に厚さ5mほどの花崗岩類の亜円礫及び円礫混じりの粗粒砂からなる段丘礫層が堆積している。

## 2. 河床堆積物と段丘堆積物

**現河床堆積物中の礫** 本遺跡のすぐ南側には木戸川が阿武隈高地から太平洋に向かって流れています。さらに北側には井出川がやはり阿武隈高地から双葉断層を越えて南東方向に流れています。以前、真鍋健一と筆者は、これら河川の河床堆積物の特徴を把握するために、比較的広く礫が分布している場所を数箇所選び、礫の種類や大きさ・形状などを調べたことがある(真鍋 2003)。以下、この結果をもとに記述する。

まず木戸川であるが、阿武隈高地から双葉断層を越えて丘陵地帯に入ったあたりから完新世の低地堆積物が広く分布するようになり、本遺跡のすぐ南方には広い氾濫原が発達している。遺跡の南方約1kmの中川原の河床で、一辺が2mの方形の範囲に含まれる直径5cm以上の礫の全てについて礫種と形状を調べた。その結果、70個の礫の内、大半の60個が黒雲母花崗岩と花崗閃綠岩で占められており、あとは片岩と閃綠岩が数個ずつで硬質砂岩と輝緑岩もごく少量含まれていた。礫の形状では、ほとんどが直径10~20cmの亜円礫であったが、長径30cmに及ぶ扁平巨礫も含まれていた。

また、この中川原の上流約2kmの双葉断層の西側に位置する夫太郎の付近でも同様の調査を行った。ここでの特徴は、中川原に比べて花崗岩類の占める割合が90%と増えており、砂岩などの堆積岩類が減っていることである。これは双葉断層のすぐ西側に分布する古生層からもたらされる礫が含まれないためと考えられる。

一方、木戸川の北を流れる井出川についても同様に礫種の調査を行った。本遺跡の北方約0.7km

の萩平付近の河床礫を調べた結果、花崗岩類が約65%、斑鰐岩～閃綠岩が20%、粘板岩や片岩類が15%となり、木戸川に比べて花崗岩類の占める割合が少くなり、古生層起源の堆積岩類が多いという特徴がある。このような両河川の河床礫の組成の違いは、上流域における阿武隈高地の地質を反映しているものと思われる(図6)。

**中位段丘堆積物中の礫** 本遺跡が位置する上ノ原付近で段丘を構成する堆積物を調べた。段丘面上に掘り上げられた堆積物中の礫種を調べた結果、花崗閃綠岩類が約50%、残りが斑鰐岩や片岩類であり、馬場前地区の段丘堆積物とは少し異なっている。

また、木戸川の南岸に位置する、馬場前地区の中位段丘を構成する堆積物については、地表面から深さ数mにわたって掘り起こされた堆積物中の礫を調べた。堆積物は一般に礫混じりの砂層であるが、礫の種類は木戸川の河床礫と似ており、調べた30箇所の中では花崗岩類が80%強、粘板岩やホルンフェルスなどの堆積岩・変成岩類が20%弱であった。ただ、礫の大きさは幾分小さく20～15cmの亜円礫がほとんどであった。

一方、遺跡の南方の橋葉町岩沢付近にも、海岸に沿って中位段丘が発達している。ここでは道路の側面に沿って段丘堆積物が露出しており、礫層中の礫種を調べることができた。その結果、ここでの礫の組成は他の段丘堆積物とかなり異なり、黒色の珪質岩やチャート・砂岩などの堆積岩類が約60%強を占め、斑状の流紋岩が30%を占めていることがわかった(図7)。

以上の結果、各地点の礫種構成が若干、異なることがわかった。また、本遺跡の段丘堆積物には存在しない流紋岩が、遺跡より南方の岩沢地区で確認できた。

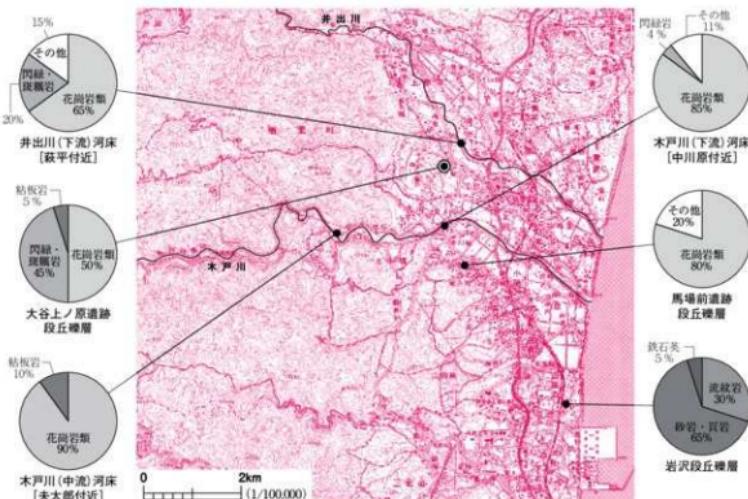


図7 橋葉町の河川礫種

### 3. 周辺の遺跡と歴史的環境

橋葉町内の遺跡は、双葉断層西側の渓谷域、断層東側に広がる丘陵及び井出川や木戸川流域の河岸段丘上、沖積平野部の自然堤防上などに立地している。以下、( )内の遺跡番号は福島県埋蔵文化財包蔵地台帳の遺跡番号5桁の内、末尾3桁を示す。

**旧石器時代** 井出川流域では塙貝遺跡(004)、北向遺跡(046)、原林遺跡(047)、木戸川流域では中女平遺跡(018)、大谷上ノ原遺跡(089)、大谷山根遺跡(092)、小塙城跡(027)、馬場前遺跡(024)、鍛冶屋遺跡(026)、天神原遺跡(061)が立地している。

橋葉町での旧石器時代の遺跡の存在は、永山亘が天神原遺跡や北向遺跡を発見したことによる。1949年(昭和24年)の相沢忠洋による群馬県岩宿遺跡の発見後、昭和20年代から30年代にかけて浜通り地方では、竹島國基が原町周辺、檜野照武が双葉郡内、永山亘がいわき市から橋葉町を精力的に踏査した。それらの成果は『福島県史 第6巻 考古資料』に紹介されている。弥生時代の遺跡でもある天神原遺跡は1964年(昭和39年)と1979年(昭和54年)に発掘調査が実施され、1,000点を超える旧石器資料が得られている。また、北向遺跡は1974年(昭和49年)に発掘調査が実施されている。

1960年代後半(昭和40年代)には、原川虎夫、原川雄二、大和田智、山内幹夫らの地道な踏査で、双葉郡内やいわき市大畑地区で旧石器時代の遺跡が新たに発見された。1981年には東北歴史資料館の企画展「旧石器時代の東北」で藤原紀敏、山内、芳賀英一により県下の資料が集成され、1983年には原川・山内らが『東北地方南部阿武隈山地東縁における先土器時代遺跡群』で表探資料を含む浜通り地方の遺跡を集成した。橋葉町の遺跡では、天神原遺跡、北向遺跡のほか、中女平遺跡、原林遺跡、塙貝遺跡の資料が掲載されている。

1980年代以降は常磐自動車道建設などに伴う大規模な調査が実施され、大谷上ノ原遺跡、小塙城跡で石器集中部が確認されている。大谷上ノ原遺跡では、始良Tn火山灰(約30,000年前 以下、A Tという)を挟んで少なくとも3時期の石器群の変遷が判明している。福島県内では数少ない、層位的上下関係が把握された遺跡といえる。

橋葉町内の確実な最古段階の人類痕跡は、後期旧石器時代前半期の大谷上ノ原遺跡1・2号ブロックである。A Tより下位の層から基部加工のナイフ形石器、台形様石器、石刃、刃部磨製石斧が出土している。馬場前遺跡、北向遺跡からも前半期の可能性がある基部加工ナイフ形石器が単体で出土している。

後期旧石器時代後半期は、大谷上ノ原遺跡でA Tより上位の層から二側縁加工のナイフ形石器を伴う集中部、小形尖頭器の集中部、集中部外から稜柱形細石刃核が出土している。小塙城跡では二側縁加工のナイフ形石器を伴う集中部、馬場前遺跡、大谷山根遺跡、上繁岡山根遺跡でもナイフ形石器が単体で出土している。天神原遺跡では、片面及び両面加工尖頭器を伴う集中部とナイフ形石器が出土している。この他、採集資料に塙貝遺跡のナイフ形石器や搔器、中女平遺跡の両面加工尖頭器、原林遺跡の剝片・搔器がある。

浜通り地方の旧石器時代の遺跡を概観すると、発掘調査で旧石器が出土した遺跡は17か所存在するが、集中部が検出された遺跡はわずかで、多くはナイフ形石器など定型石器の単体出土である。

前半期は南相馬市の荻原遺跡で基部加工ナイフ形石器と刃部磨製石斧を伴う集中部が確認されているほか、浪江町朴迫D遺跡でもナイフ形石器と刃部磨製石斧、いわき市輪山遺跡で台形石器が出土している。他にも前半期とみられる資料が散見されるが、資料数の制約から詳細な時期の比定は困難である。

後半期は新地町三貫地遺跡、いわき市輪山遺跡でナイフ形石器を伴う集中部が検出されているほか、南相馬市五畝田・犬這遺跡で切出形、相馬市段ノ原A遺跡で杉久保型が出土している。いわき市須賀蛭A遺跡・横山B遺跡、富岡町本町西A遺跡・後作A遺跡、浪江町小追遺跡、南相馬市館越遺跡、新地町北原遺跡でもナイフ形石器が出土している。採集資料では、いわき市大畑遺跡、広野町東下遺跡、双葉町手小塚A遺跡、浪江町上ノ原遺跡がある。

尖頭器石器群は新地町赤柴遺跡の調査で桶状剝離尖頭器の集中部、同町南狼沢B遺跡、いわき市朝日長者遺跡・須賀蛭A遺跡、浪江町朴迫D遺跡、南相馬市荻原遺跡がある。採集資料は、いわき市大畑K遺跡・のじど遺跡・古事又遺跡・亀ヶ崎遺跡、広野町東下遺跡、双葉町羽山遺跡、大熊町小入野遺跡、南相馬市石倉遺跡、橋本町A遺跡・陣ヶ崎A遺跡・赤柴遺跡などで確認されている。東下遺跡・亀ヶ崎遺跡・大畑K遺跡のものは桶状剝離尖頭器、朝日長者遺跡は有舌尖頭器に関連する資料である。

細石刃石器群に関連する資料は少ない。稜柱形細石刃核は新地町南狼沢B遺跡・赤柴遺跡、北方系では新地町赤柴遺跡で細石刃核削片、相馬市段ノ原B遺跡で船底形細石刃核、いわき市屋敷前遺跡、南相馬市荻原遺跡で荒屋型彫器、採集資料では大畑遺跡で細石刃核削片と荒屋型彫器が確認されている。

旧石器時代終末から縄文時代草創期までは不明な点が多い。尖頭器や搔器にその可能性のある資料が含まれている。周辺では飯館村大坂遺跡で神子柴型石斧が出土している。

この他、詳細な時期は不明確であるが、広野町の折木遺跡で不定形剝片の集中部が確認されているほか、南相馬市四ツ栗遺跡・横大道遺跡、採集資料では広野町狸森遺跡、大熊町上総屋敷遺跡・北台遺跡、浪江町酒田原遺跡・北上ノ原遺跡、南相馬市高見町遺跡・南町遺跡・滝ノ原遺跡・高松遺跡・西町遺跡、橋本町B遺跡・前田遺跡・熊下遺跡・畦原A遺跡などでも旧石器資料が得られている。

**縄文時代** 榛葉町で草創期の遺跡は、今のところ発見されていない。早期は鍛冶屋遺跡(026)で中葉の竪穴住居跡が検出された。また、北向遺跡(046)で押型文系土器、大谷上ノ原遺跡(089)で沈線文系土器が出土している。前期になると大谷上ノ原遺跡、塙貝遺跡(004)、赤粉遺跡(079)で集落跡が発見されている。中期は、代遺跡(58)、井出上ノ原遺跡(070)、馬場前遺跡(024)が挙げられる。特に馬場前遺跡では100軒以上の複式炉を伴う竪穴住居跡が検出され、中心的な集落であることが判明した。また、馬場前遺跡と井出上ノ原遺跡から出土したサメの歯形石器は全国的にも希

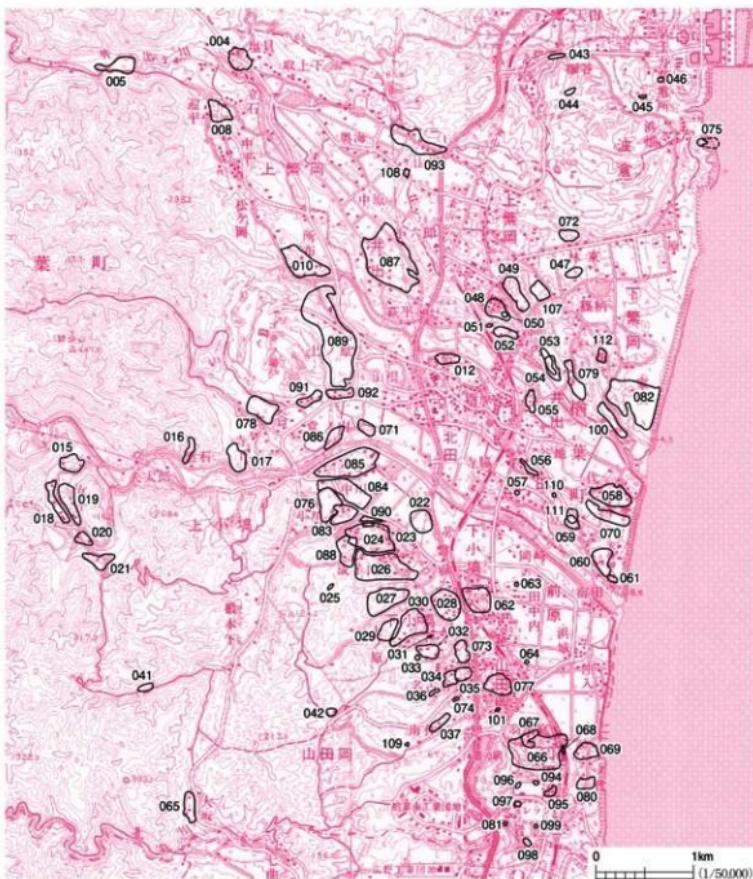


図8 桧葉町周辺の遺跡

※遺跡番号は相島基原城文化財伝承地名帳の遺跡番号5桁のみ。本図3桁を示す。

少な例である。後・晩期に入ると遺跡の立地が変わり、双葉断層西側の渓谷域や下位段丘面に分布する傾向が認められる。後期は馬場前遺跡、鍛冶屋遺跡で後期前葉の集落跡、晩期は代遺跡、所布遺跡(010)、西ノ内遺跡など後半期に属する遺跡がある。

**弥生時代** この時代の遺跡は中位段丘に多いが、低位段丘や沖積平野部にも分布する。前・中期では集落跡が見つかった美シ森B遺跡(095)、少量の土器片が出土した所布遺跡(010)、下小塙上ノ原遺跡(030)がある。これらに後続する遺跡として、天神原遺跡(061)、下小塙上ノ原遺跡、久保田遺跡(062)、北向遺跡(046)、大倉平遺跡(028)、崇神山遺跡(080)、新堤入遺跡(109)などが挙げられる。

表1 桥葉町の遺跡一覧

遺跡 番号	遺跡名	所在地	種別	時代	
				古	新
004	埴貝遺跡	上野岡 宇塙貝	散布地	●	● ● ●
005	羽山遺跡	井出 宇羽山	散布地	●	
006	立石遺跡	井出 宇道平	散布地	●	
010	所布遺跡	井出 宇所布	散布地	●	●
012	八石遺跡	井出 宇八石	散布地	●	
015	北女平遺跡	上小坂 宇女平	散布地	●	
016	黒石遺跡	大谷 宇黒石	製鉄跡		●
017	大谷鉄跡	大谷 宇西代	城館跡		●
018	中女平遺跡	上小坂 宇女平	散布地	●	●
019	中倉遺跡	上小坂 宇中倉	散布地	●	
020	南女平遺跡	上小坂 宇女平	散布地	●	
021	水無遺跡	上小坂 宇中平	散布地	●	
022	宮田遺跡	上小坂 宇宮田	散布地	●	●
023	岩下製鉄跡	上小坂 宇岩下	製鉄跡		
024	馬場遺跡	上小坂 宇馬場前	集落跡	●	● ● ●
025	山道横穴群	上小坂 宇山道	横穴墓	●	
026	鎌山遺跡	上小坂 宇鎌山	集落跡	●	● ● ●
027	小崎城跡	下小坂 宇正明寺	城館跡	●	●
028	大倉平遺跡	下小坂 宇大倉平	散布地	●	●
029	上ノ原城跡	下小坂 宇上ノ原	城館跡	●	●
030	下ノ原上ノ原遺跡	下小坂 宇ノ原	集落跡	●	● ● ●
031	地野横穴群	下小坂 宇地野	横穴墓	●	
032	後沢遺跡	山田岡 宇堂平	散布地	●	
033	堂平鬼寺跡	山田岡 宇後沢	社寺跡	●	
034	名古谷製鉄跡	山田岡 宇名古谷	製鉄跡		
035	宮下城跡	山田岡 宇宮下	散布地	●	
036	名古谷横穴群	山田岡 宇名古谷	横穴墓	●	
037	油作製鉄跡	山田岡 宇油作	製鉄跡	●	
041	ダグラス鉄跡	下小坂 宇ダグラ	製鉄跡	●	●
042	上ノ原横穴群	下小坂 宇ノ原	横穴墓	●	
043	ボラ横穴群	波倉 宇福谷	横穴墓	●	
044	五反田横穴群	波倉 宇五反田	横穴墓	●	
045	北向横穴墓	波倉 宇北向	横穴墓	●	
046	北向横穴墓	波倉 宇北向	集落跡	●	● ● ●
047	原林遺跡	下野原 宇林東	散布地		
048	津光西遺跡	井出 宇津光西	散布地	●	● ●
049	津光東遺跡	井出 宇津光東	散布地	●	
050	津光北遺跡	井出 宇向ノ内	社寺跡	●	
051	井出一塚	井出 宇向ノ内	塚跡		
052	向ノ内遺跡	井出 宇向ノ内	散布地	●	●
053	相ノ内遺跡	井出 宇相ノ内	散布地	●	●
054	相ノ内遺跡	井出 宇相ノ内	散布地	●	●
055	高橋横穴群	井出 宇高橋	集落跡	●	●
056	合振横穴群	北田 宇合振	横穴墓	●	
057	船場古墳	北田 宇新田東	古 墳	●	
058	代遺跡	井出 宇代	集落跡	●	
059	北門上遺跡	井出 宇ノ原	集落跡	●	● ●
060	天神山城跡	北田 宇ノ原	城館跡	●	
遺跡 番号	遺跡名	所在地	種別	時代	
				古	新
061	天神原遺跡	北田 宇天神原	その他	●	●
062	久保田遺跡	下小坂 宇久保田	散布地	●	●
063	田中内古墳	前原 宇田中内	古 墳	●	●
064	稻荷古墳	山田岡 宇稻荷前	古 墳	●	
065	大坂遺跡	山田岡 宇大坂	散布地	●	
066	植え城跡	山田岡 宇植え	城館跡	●	
067	崩ノ原遺跡	山田岡 宇崩	散布地	●	
068	陣場横穴群	山田岡 宇出羽庭	横穴墓		
069	代来遺跡	山田岡 宇代来	集落跡		
070	井出上ノ原遺跡	井出 宇上ノ原	集落跡	●	●
071	海法地遺跡	大谷 宇海法地	散布地	●	●
072	原遺跡	波倉 宇原	散布地	●	
073	広堀遺跡	山田岡 宇広堀	集落跡	●	
074	松ノ口横穴群	山田岡 宇松ノ口	横穴墓		
075	賀賀城跡	波倉 宇原	城館跡	●	
076	小山城跡	上小坂 宇小山	城館跡	●	●
077	古駅遺跡	山田岡 宇古駅	散布地	●	●
078	名合沢城跡	大谷 宇名合沢	城館跡	●	
079	赤舟遺跡	下荒岡 宇赤舟	集落跡	●	
080	崇神山遺跡	山田岡 宇上ノ代	散布地	●	●
081	岩沢跡	山田岡 宇岩沢	その他	●	
082	植松遺跡	下野原 宇植松	集落跡	●	●
083	小山八遺跡	上小坂 宇小山	散布地	●	
084	小山巨遺跡	上小坂 宇小山	集落跡	●	●
085	中川原遺跡	大谷 宇中川原	散布地	●	●
086	伴田遺跡	大谷 宇伴田	製鉄跡	●	
087	奥瀬遺跡	上野岡 宇奥瀬	散布地	●	
088	木戸川善徳社跡	上小坂 宇宮前	散布地	●	●
089	大谷上ノ原遺跡	大谷 宇上ノ原	集落跡	●	●
090	岩下遺跡	上小坂 宇懶内	散布地	●	
091	山岸遺跡	大谷 宇屋山岸	散布地	●	
092	大谷山遺跡	大谷 宇山根	集落跡	●	
093	上荒岡山根遺跡	上荒岡 宇山根	散布地	●	
094	美少森古遺跡	山田岡 宇美少森	集落跡	●	
095	美少森古遺跡	山田岡 宇美少森	集落跡	●	
096	横ヶ子原A遺跡	山田岡 宇横ヶ子	散布地	●	
097	美少森C遺跡	山田岡 宇美少森	その他	●	
098	下岩沢遺跡	山田岡 宇下岩沢	城館跡	●	
099	下岩沢遺跡	山田岡 宇下岩沢	その他	●	
100	小田林遺跡	下野原 宇小田林	散布地	●	
101	豪農寺横穴群	山田岡 宇豪作	横穴墓	●	
102	林道遺跡	下野原 宇林東	散布地	●	
103	二枚横道跡	上野原 宇二枚橋	散布地	●	
104	新堤入遺跡	山田岡 宇新堤入	集落跡	●	
105	合瀬古墳	北田 宇合瀬	古 墳	●	
106	合瀬遺跡	北田 宇合瀬	散布地	●	
107	南代遺跡	下野原 宇南代	製鉄跡	●	●

時代(略): 古(旧石器), 漢(文), 魏(文), 汉(漢), 朝(朝), 平(平), 中(中), 近(近), 過(過)

※遺跡番号は総務省所蔵文化財登録地図物の遺跡番号を用いたもの。未尾3桁を削除。

特に天神原遺跡は、土壙墓49基と土器棺墓33基からなる弥生時代中期後半の集団墓域であることが判明した。東日本の弥生時代の墓地としては最大級の規模であり、遺跡は県指定史跡、土器は国指定重要文化財の指定を受けている。後期の遺跡は、天王式期の波鏡院遺跡が確認されるのみである。

**古墳時代** この時代の前・中期の集落遺跡は未確認である。後期は基盤層の凝灰岩を掘り込んだ横穴墓群が多く発見され、北向横穴墓(045)、名古谷横穴群(036)、松ノ口横穴群(074)などが調査されている。墳丘をもつ古墳は、船場古墳(057)、田中内古墳(063)、稻荷古墳(064)がある。集落跡

は確認されていないが、土器の散布地が数箇所発見されている。

**奈良・平安時代** 当地域は岩城郡に属していたと推定されている。遺跡は中位段丘面に多く、一部は沖積平野部の低地にも分布している。発掘調査された遺跡は、赤粉遺跡(079)、植松遺跡(082)、北向遺跡(046)、古駅遺跡(077)、下小塙上ノ原遺跡(030)、馬場前遺跡(024)、鍛冶屋遺跡(026)、小山B遺跡(084)、新堤入遺跡(109)、南代遺跡(112)などである。平安時代初頭、9世紀代を中心とする集落跡が多く、鍛冶屋遺跡では鍛冶工房、南代遺跡では製鉄関連遺構を伴う。

**中世** 椿葉町周辺は岩城氏と相馬氏との勢力境にあたり、中世を通じて攻防の要所であったようである。城館跡は木戸川を境にして南側に椿葉城跡(066)、小塙城跡(027)、上ノ原城跡(029)、小山城跡(076)、北側に大谷館跡(017)、名合沢館跡(078)、天神山城跡(060)、井出城跡(054)、蓑輪城跡(075)が残っている。城館の中心部が調査された小塙城跡では、14～16世紀の輸入陶磁や国産陶器が大量に出土した。鍛冶屋遺跡(026)では掘立柱建物跡の柱穴から室町時代前期と推定される銅鏡、馬場前遺跡(024)では土坑内から一括埋納錢が出土している。

**近世～幕末** 近世の当初は磐城平藩の支配となるが、その後はめまぐるしく支配者が変遷し、延享4(1747)年以降は幕領となり、代官支配を経て幕末を迎える。馬場前遺跡(024)では木戸八幡神社に関連すると考えられる掘立柱建物跡と大溝、下小塙上ノ原遺跡(030)では掘立柱建物跡が確認されている。現存する遺構としては井出一里塚(051)、木戸宿の脇本陣の一部が保存されている。また、製鉄遺跡が約20か所存在し、製塩・窯業も行われていたことが確認されている。

## 引用・参考文献

- 荒木麻衣 2015 「付編2 常磐自動車道遺跡発掘調査の総括」『常磐自動車道遺跡調査報告72』福島県教育委員会  
 (公財)福島県文化振興財団
- 久保和也・柳沢幸夫・吉岡敏和・高橋 浩 1994 『浪江及び磐城富岡地域の地質』地質調査所・通商産業省工業技術院  
 鈴木敬治・吉田 義・白瀬美智雄 1991 『浪江・磐城富岡』福島県国土調査・土地分類基本調査
- 福島県農地林務部農地計画課
- 鈴木敬治・吉田 義・白瀬美智雄 1993 『井出・川前』福島県国土調査・土地分類基本調査 福島県農地林務部農地計画課  
 東北歴史資料館編 1984 『旧石器時代の東北』東北歴史資料館
- 椿葉町史編纂委員会 1988 『椿葉町史』(第二巻 自然・考古・古代・中世・近世資料) 福島県椿葉町
- 椿葉町史編纂委員会 1991 『椿葉町史』(第一巻 通史) 福島県椿葉町
- 根本 守 1991 『地質』『椿葉町史』(第一巻 通史) 福島県椿葉町
- 原川虎夫・原川進二・山内幹夫 1983 『東北地方南部阿武隈山地東縁における先土器時代遺跡群』
- 福島県 1964 『福島県史 第6巻 資料編I 考古資料』
- 藤原紀敏 2010 『福島県』「日本列島の旧石器時代遺跡－日本旧石器(先土器・岩宿)遺跡のデータベース－」日本旧石器学会  
 真鍋健一 2003 「付編1 馬場前遺跡の複式炉を構成する礫の产地について」『常磐自動車道遺跡調査報告34』
- 福島県教育委員会 (財)福島県文化振興事業団

## 第2章 調査概要と成果

### 第1節 調査概要

#### 1. 位置と地形

本遺跡は、福島県双葉郡楢葉町大字大谷字上ノ原・山根地内に所在する。5次調査を行った発掘調査区の中心は、北緯37度17分11秒、東経140度58分57秒に位置する。遺跡はJR常磐線竜田駅から西へ約2kmに位置し、楢葉町の海岸線からは3kmほど内陸に入っている。遺跡の東方約1kmを国道6号が通り、遺跡の東に接する形で県道35号いわき浪江線が通っている。

本遺跡は、本県浜通り地方に特徴的な阿武隈高地東縁に形成された、標高70mほどの段丘面上に位置する。浜通り地方の段丘は、阿武隈高地から東の太平洋に向かって流れる河川により形成され、その支流により段丘地形に開折谷が入り組んだ複雑な地形となっている。地形分類図によれば、本遺跡は中位段丘面(正確には中位Ⅱ面)という仙台層群大年寺層を基盤に形成された河岸段丘上に立地する。この中位段丘は、標高を下げながら海岸線の天神岬まで続いている、楢葉町では比較的大きな段丘平坦面といえる。

遺跡は段丘の付け根部分に広がり、北側を井出川、南側には楢葉町で最も大きい河川である木戸川が流れ、遺跡の東西は木戸川に注ぐ支流に挟まれた舌状台地にある。木戸川の河床から遺跡まで約65mの比高差、北側を流れる井出川の河床からも約40mの比高差がある。舌状台地西側に接する谷は深く開折され、段丘崖から急斜面で谷まで落ち込んでいる。

#### 2. 調査の経過

本遺跡で平成28年度に実施した5次調査(調査面積1,700m<sup>2</sup>)の調査経過を記載する。

平成28年4月1日に、28教文第7号「平成28年度埋蔵文化財発掘調査業務委託契約」により、県教委は財団に対し、本事業に係る大谷上ノ原遺跡の本発掘調査11,000m<sup>2</sup>の委託を行った。これを受け、要保存面積11,000m<sup>2</sup>の内、用地取得済み箇所1,700m<sup>2</sup>について、本発掘調査が可能な状況であることが確認されたため、4月12日付け28教文第605号「常磐自動車道遺跡発掘調査について(通知)」により、県教委は財団に対し本発掘調査(1,700m<sup>2</sup>)の指示を行った。このことをふまえ、4月14日に県文化財課とネクスコと財団の3者による協議を現地にて行った。本発掘調査に先立ち、過去に常磐自動車道本線工事等で施工された盛土については、ネクスコが撤去し、発掘調査区の外に搬出することとなった。

5月6日には、財団が設置する作業員休憩所・発掘残土の置き場等の土地については、東日本高速道路株式会社東北支社いわき管理事務所と財団が不動産使用賃貸借契約を締結した。5月17日

には、ネクスコによる盛土除去工事が開始された。調査区全域に盛土が1.5m以上堆積していることが判明し、その除去と調査区外への搬出に長時間を要することが予想された。5月17～19日、財団は橋葉町町民を対象とした発掘作業員の募集説明会を実施したが、1名の応募にとどまった。

5月24日には、盛土除去工事が終了した箇所から、財団は表土掘削業務を開始した。また、盛土施工に伴って埋蔵文化財包蔵地の一部損壊がなされた痕跡が認められた。このことについて翌25日に県文化財課・ネクスコ・財団の3者による現地協議を実施した。埋蔵文化財包蔵地の一部損壊については、ネクスコが過去の工事履歴を調査し、県文化財課に報告書を提出することとなった。

6月2日には、遺構検出作業中、地山層(LIV)より旧石器が出土した。このことを受け、県教委は6月15日付け28教文第629号「平成28年度常磐自動車道遺跡発掘調査について(通知)」において、縄文時代以降の調査終了後、旧石器時代の調査を行うように追加の指示を行った。6月3日には、調査区内でコンクリート片等の産業廃棄物が投棄された箇所が見つかったため、県文化財課・ネクスコ・財団による3者による現地協議を実施した。その後、ネクスコは6月9日に福島県相双地方振興局県民環境部環境課へ状況及び処理方法の説明を行い、関係法令に基づき適切に処分することとなった。6月14～16日に、財団は橋葉・広野町町民を対象とした発掘作業員の募集説明会を実施し、8名の応募があった。

7月5日に、財団は発掘作業員9名を雇用し、本格的な発掘調査を開始した。7月8日には、ネクスコによる盛土除去工事が完了した。7月13日には、調査区の西端部より、ナイフ形石器を含む旧石器が10点出土した。7月20日には、財団は旧石器の分布状況を確認するため、小型重機等による地山層掘削と排土運搬業務を委託し、作業を開始した。8～9月は、2度にわたり台風が直撃する事態となったが、事故等なく、調査は順調に推移した。

10月5日には、遺構や遺物の配置状況がほぼ明らかになったことから、全体の地形を記録するため、ラジオコントロールヘリコプターによる空中撮影を実施した。10月13日には、旧石器の出土履順を年代が明らかな広域降下火山灰と対比するため、土壤サンプルを採取し、調査機間に分析を委託した。10月20日には、東北大学文学部の柳田俊雄名誉教授、鹿又喜隆准教授が遺跡を見学された。

10月21日には、財団は1,700m<sup>2</sup>の箇所について、発掘作業の終了を県文化財課に報告するとともに、発掘作業員の雇用を終了した。10月26日には、県文化財課は1,700m<sup>2</sup>の箇所について、記録保存の終了を確認し、ネクスコに現状のまま引き渡した。なお、調査区西端部の隣接地(ならはP A用地の法面箇所:図13の未発掘範囲)については、旧石器が出土する可能性があることから、県文化財課とネクスコで工事立会等の対応を協議することとなった。また、ネクスコより本遺跡において文化財保護法に違反する盛土工事等がなされた経緯について、報告書が提出された。同月末日までに、財団は調査連絡所等の撤去を行い、現地での作業は終了した。11月2日に、財団は橋葉町教育委員会に5次調査の終了と出土遺物等の成果について、説明を行った。

県教委は財団に対し、平成28年度内に本遺跡の5次調査の報告書刊行が見込まれることから、12月6日付け28教文第676号「福島県文化財調査報告書の刊行について(通知)」において、報告書

の刊行準備を進めるよう指示を行った。このことを受け、財団は整理作業及び報告書作成作業を進めた。

年が明けた2月に県教委は財団に対し、2月20日付け28教文第709号「福島県文化財調査報告書の刊行について(通知)」において、報告書の刊行の指示を行い、3月24日に本報告書『常磐自動車道遺跡調査報告73』を刊行した。

### 3. 調査の方法

本遺跡では、常磐自動車道建設に伴い、過去に4次の本発掘調査が行われている。一連の調査では、平成11年度の1次調査で設定した調査用のグリッドを踏襲しており、今回の5次調査でもそれに倣った。最近の調査では測量座標系は世界測地系(新測地系)を採用しているが、1~4次調査との整合性を取るため、5次調査においては日本測地系(旧測地系)を用いた。1~4次調査の測量基準点が失われていたため、今回の調査では4級基準点2点とグリッド杭3点の打設を、測量会社に委託した。

グリッド設定については、日本測地系である国土座標を基準として10m四方のグリッドを設けた。グリッドの原点については、遺跡の調査区全体を囲むため調査区の外にあたるX:143,400、Y:102,000に設定した。グリッドについては、南北10m、東西10m四方の方眼を一単位とし、南北方向の北から南へ算用数字で1・2・3…、東西方向の西からアルファベットの大文字でA・B・C…という記号を与えた。この組み合わせでグリッドを表示し、R 40グリッド、S 41グリッドなどと呼称した。

遺構の番号は各遺構で1~4次調査からの通し番号を付した。つまり、石製造物集中部(以下、ブロックという)については6号ブロック、土坑については109号土坑からの遺構番号を付した。土坑の掘削に際しては、表土を重機で除去し、それ以下の土層については人力で堆積層ごとに順次掘り下げを行い、遺構検出面まで除去した。遺構の掘り込みは、土坑では2分割法を使用した。堆積土については、遺構外堆積土をアルファベット大文字の「L」とローマ数字とを組み合わせてL I・II…、遺構内堆積土はアルファベット小文字の「ℓ」と算用数字とを組み合わせてℓ 1・ℓ 2…と表記した。さらに、土層の細分には、アルファベットの小文字を使用してL VI a、ℓ 1 aのように示した。

石器の採り上げ番号は、西暦年度の下2桁の丸数字「16」と算用数字で1・2・3…とし、具体的には@-1・@-2・@-3などとした。石器の出土層位を記録するため、できる限り石器を残したまま、下の土層を断ち割り、柱状図や写真記録に努めた。炭化物の採り上げ番号も、西暦年度の丸数字「16」と炭化物を示す「C」と算用数字で1・2・3…とし、具体的には@-C 1・@-C 2・@-C 3などとした。

遺構調査の記録写真は調査の進捗に併せて、検出状況・土層観察用畦の断面・遺物出土状況・完掘状況等の写真を適宜撮影した。撮影の中心に使用したものは、35mm判のカラーリバーサルフィル



図9 グリッド配置図

ムとモノクロームフィルム、また一眼レフタイプのデジタルカメラである。遺跡全体の広範囲にわたる撮影には、ラジコンヘリコプターを使用し、高所からの遺跡全体や6号ブロック等の空中撮影を実施した。遺構図面は、上記のグリッドを基準として1/20の縮尺を基本として作図した。地形図や石器の出土位置については、光波測距儀を用いて記録した。

本発掘調査で得られた出土遺物及び諸記録は、財團遺跡調査部において、整理作業を実施した。それらの結果は本報告にまとめたが、現地にてサンプリングを実施し、分析業務を委託した火山灰分析、植物珪酸体分析、さらに放射性炭素年代測定の結果については次年度以降の報告に反映させることとした。なお、出土遺物及び記録については、所定の様式に従い各種台帳を整理した後、福島県文化財センター白河館に収蔵・保管する予定である。

#### 4. 基本土層(図10~12、写真6・7)

土色の決定は、土色計[第一合成株式会社製 S C R-1]を用いた。以下に記載した火山灰層序について、1・2次調査に実施したものである。なお、5次調査の火山灰層序については、現地にてサンプリングを実施したが、本報告作成時においては分析を実施中である。

- L I : 黒褐色シルト 7.5YR3/1 [表土] 上部に1m以上の盛土層(碎石)がある。
- L II : 黒褐色シルト 7.5YR3/2 炭化物微量含む。
- L III : 暗褐色シルト 10YR3/3 [漸移層] 繩文時代の遺構掘込面である。部分的に灰褐色シルト(7.5YR4/2)が混じる。焼土塊・黄褐色粘土塊を微量含む。過年度調査で沼沢第1テフラ(Nm-1: 0.5ka)、浅間板鼻黄色軽石(As-YP: 15ka)を検出している。
- L IV : 褐色粘土質シルト 7.5YR4/3 [ローム質土] 土色はややくすんだ印象を受ける。しまり弱く、下位ほど黄褐色粘土の割合が増す。過年度調査では最上部より浅間板鼻黄色軽石を検出している。
- L V : にぶい褐色粘土質シルト 7.5YR5/4 [ローム質土] L IV・VI aに比べて土色は明るい。粘性がやや強く、やや硬質な土質である。過年度調査では層の中ほどから始良Tn火山灰(以下、A Tという: 30ka)を検出している。
- L VI a : 褐色粘土質シルト 7.5YR4/3 [ローム質土] 土色はややくすみ、「暗色帶」に相当。粘性がやや強く、やや硬質な土質である。長石粒や凝灰質泥岩粒を微量含む。
- L VI b : にぶい黄褐色粘土質シルト 10YR4/3 [ローム質土] 土色はL VI aに比べて、わずかに暗く、「暗色帶」に相当する。粘性がやや強く、やや硬質な土質である。長石粒や凝灰質泥岩粒を微量含む。
- L VII : 褐色シルト質粘土 7.5YR4/4 [ローム質土] 粘性が強く、硬質な土質である(ハードローム)。凝灰質泥岩の風化粘土を含む。段丘礫をわずかに含む。過年度調査では最上位より安達太良二本松第1テフラ(Ad-N1)、赤城鹿沼テフラ(Ag-K: 44ka)を検出している。
- L VIII : にぶい黄褐色シルト質粘土 10YR4/3 [ローム質土] 粘性が強く、硬質な土質である(ハー

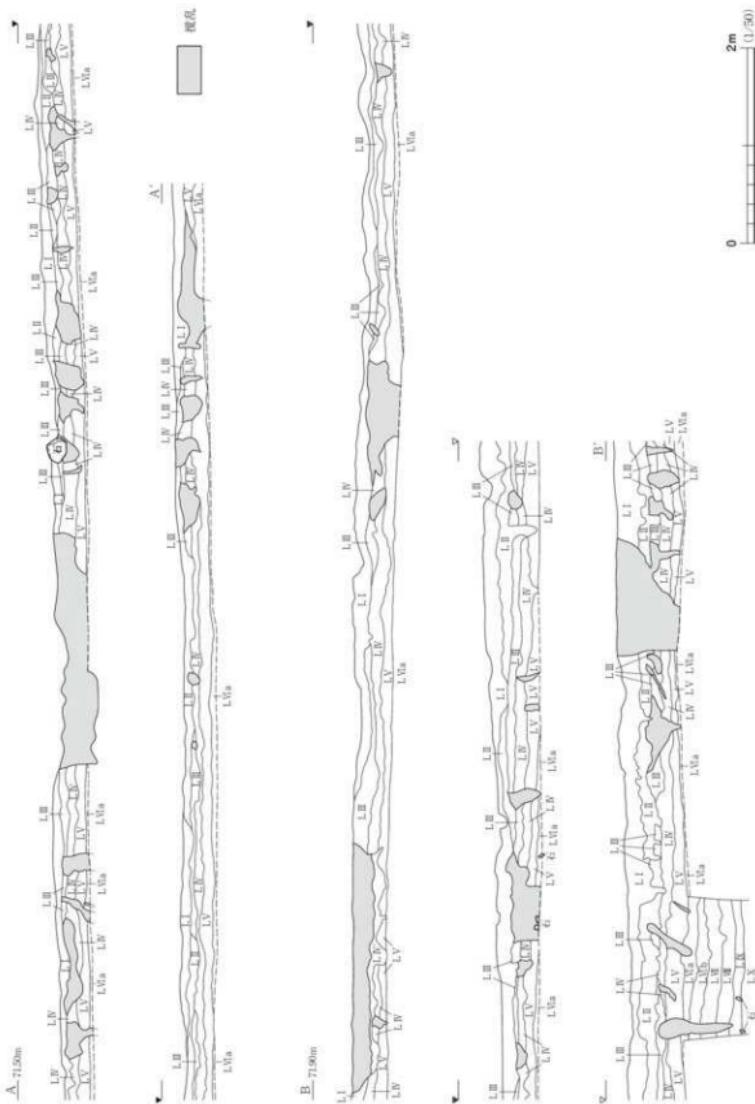
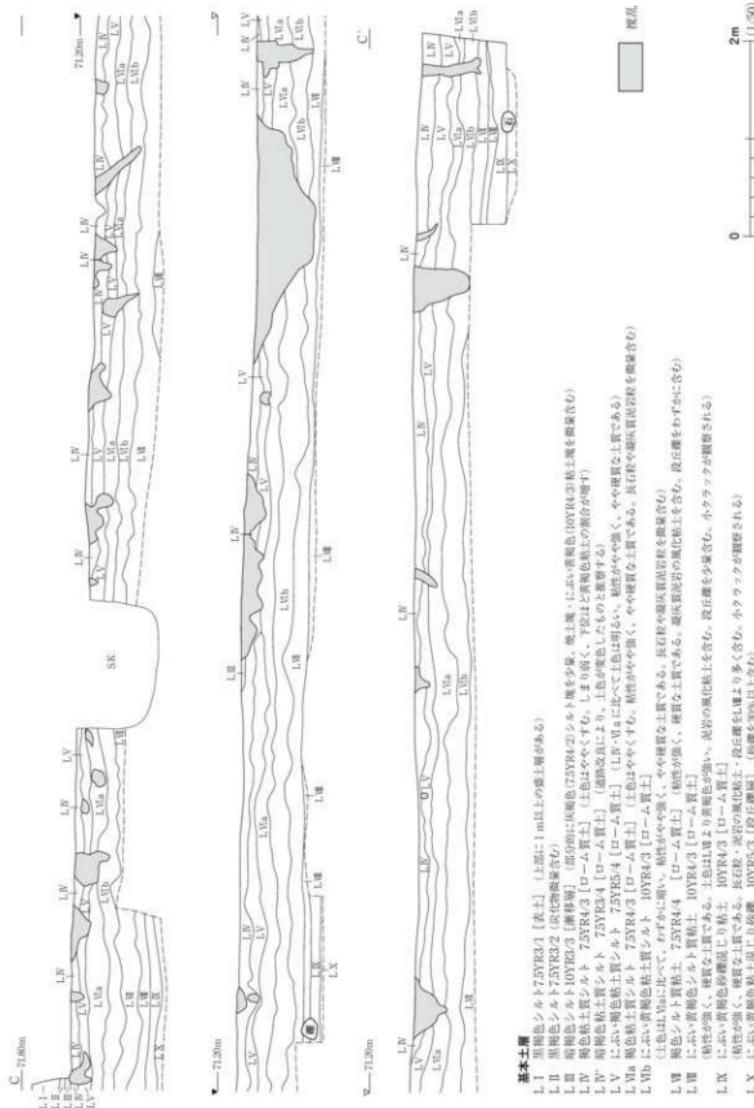


图10 基本土层断面图（1）



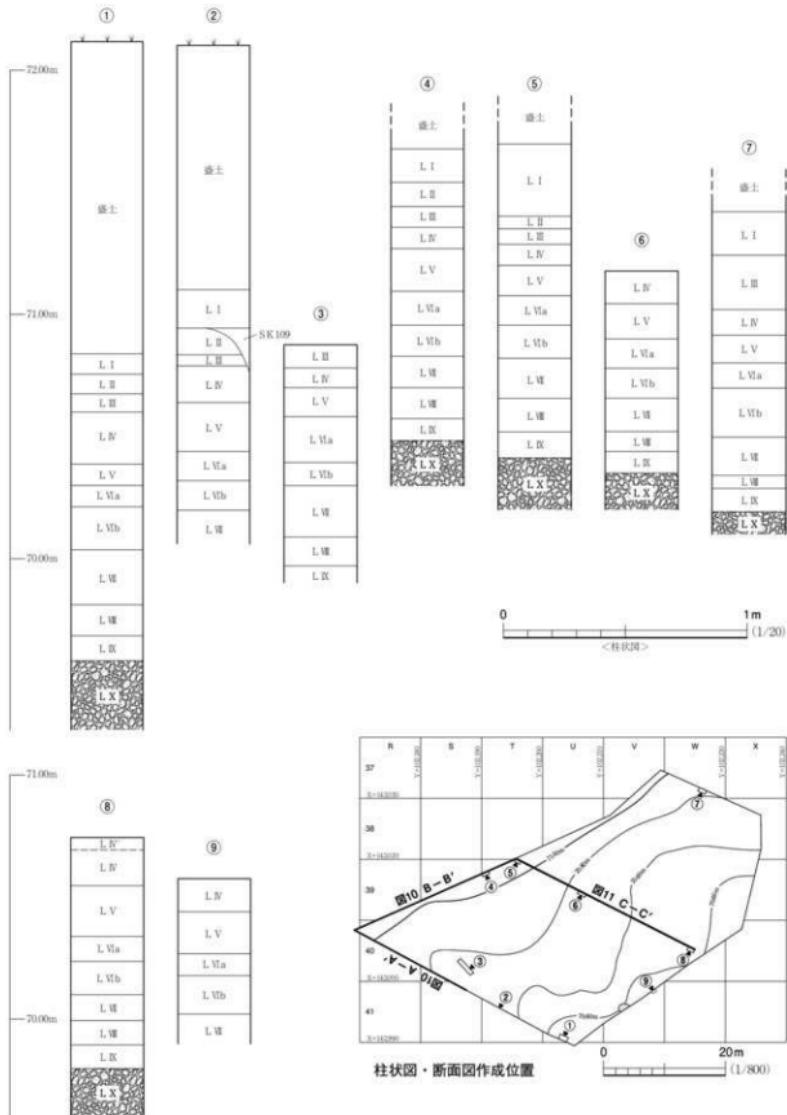


図12 基本土層柱状図

ドローム)。土色はLⅦより黄褐色が強い。泥岩の風化粘土を含む。段丘礫を少量含む。小クラックが観察される。

LIX：にぶい黄褐色砂礫混じり粘土 10YR4/3 [ローム質土] 粘性が強く、硬質な土質である(ハードローム)。長石粒・泥岩の風化粘土・段丘礫をLⅦより多く含む。小クラックが観察される。

LX：にぶい黄褐色粘土混じり砂礫 10YR5/3 [段丘礫層] 砂礫を30%以上含む。

## 第2節 遺構と遺物

### 1. 調査区の概要

本年度、5次調査を行った調査区は東側が2次調査区、北西側が4次調査区と接している(図5)。調査対象面積は1,700m<sup>2</sup>である。ただし、4次調査区と接する箇所については、ならばPAの安全を確保するため、340m<sup>2</sup>の未発掘範囲がある。また、調査区北東壁についても、法面勾配を約70度としたため、60m<sup>2</sup>の未発掘範囲が生じている(図13)。これらの未発掘範囲については、ネクスコが工事を行う際に安全を確保したのち、県文化財課が対応を協議することとなった。

5次調査区のLVIa上面で測量した等高線を見ると、北西から南東に緩やかに傾斜する地形である(図13)。1～5次調査の成果を合せた遺構配置図(図24)を見ると、今回の調査区は段丘平坦面の縁辺部にあたり、調査区の南西側は約50mで段丘崖に至る。南側に木戸川を望む、台地縁辺部の平坦地といえよう。

次に地山の土質であるが、砂を含むローム質の土が厚い所では1.4m以上堆積しており、LIV上面などで礫層が露出している箇所は、風倒木痕周辺を除けば、ほとんどない。また、一定程度の砂を含んでいるシルトが主体であるため、水はけは良い方である。例えば直径1m、深さ0.8m程度の土坑に満杯に溜まつた水が半日でなくなる程度であり、段丘礫層(LX)まで掘っても、地下水が湧き出ることははない。

これまでの調査の遺構配置図(図24)を見ると、段丘平坦面の縁辺部に遺構が集中する傾向がある。特に旧石器のブロックは、ほとんどが縁辺部で見つかっており、今回の調査区もそれにあたる。

5次調査で検出した遺構は、旧石器時代のブロック1か所と縄文時代以降の所産と考えられる土坑が8基である。これらの遺構は、調査区西部に比較的多く分布していることから、縁辺部のなかでも段丘崖に近い箇所に集中する傾向がある。

### 2. 旧石器時代の遺物と出土状況

**石器出土状況**(図14・15、写真8～11) 5次調査では、24点の旧石器がLIIからLVにかけて出土したが、主体はLIVからである(LII:1点、LIII:2点、LIV:16点、LV:5点)。石器ごとに記録した柱状図(図15)によれば、石器の出土層位はLIVが主体であると認識している。なお、

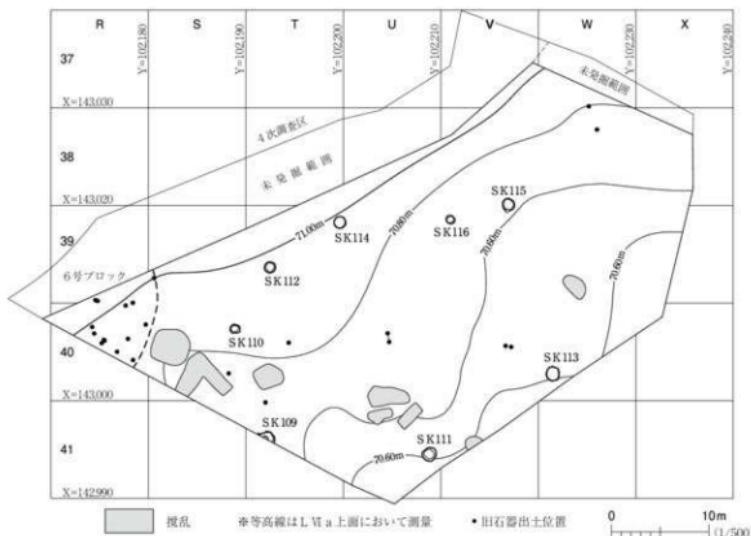


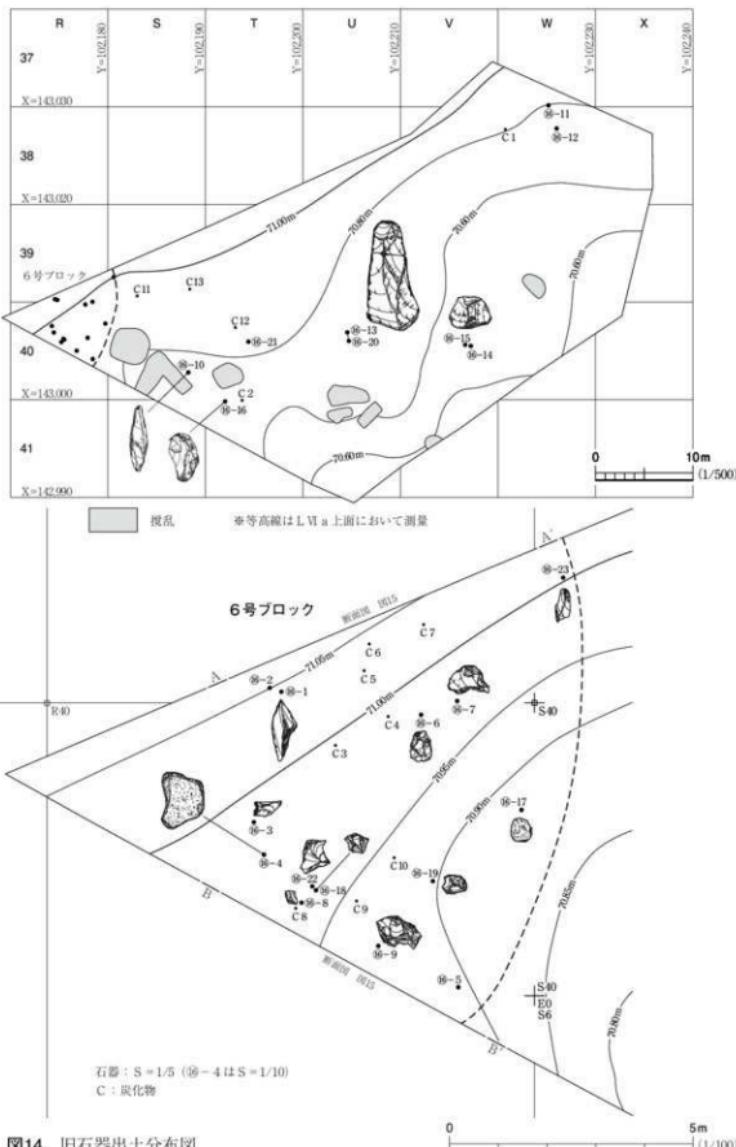
図13 遺構配置図

今回の調査区では、L VI a以下の層では石器は出土しなかった。過年度の火山灰分析の結果を参照にすれば、浅間板鼻黃色輕石(L III)とAT(L V)の間から出土した可能性が高いが、次年度以降の報告で、本調査区内の火山灰分析と石器出土層位との対比については検証する必要がある。

平面的には、調査区の西端部のR 39・40グリッド付近に14点の石器がまとまって分布しており、やや散漫ではあるが6号ブロックと認定している。平面的な広がりは東西が約6.5m、南北約8.5mである。ブロック内から出土した石器の出土標高は、最も低いもの(採上No.16-23)が70.968mで、最も高いもの(採上No.16-1)が71.267mで、約30cmの高低差がある。全体的に見れば、71.05～71.20mの間に9点の石器が出土し、それほどの高低差はない。図17-1の台石(採上No.16-4)が約71.2mであることを加味すれば、このあたりの標高が生活面に相当するものと推定する。層位的に見れば、L IVの中位から下位に比定され、最も標高が低いもの(採上No.16-23)でもL Vの最上位で収まるようである。

このほか、10点の石器は6号ブロックから離れて出土した。それぞれの出土層位は図15の柱状図に示したが、L IVが主体であり、L Vの最上位までに収まるようである。現時点では6号ブロックとそれ以外から出土した石器は、同一文化層を形成する石器群と認識している。

**6号ブロック出土の石器**(図16・17、写真14) 6号ブロックを構成する石器は、ナイフ形石器1点、抉入搔器1点、削器1点、微細剝離のある剥片3点、剥片7点、台石1点であった。石器製作に伴うような石核や碎片などは出土しなかった。また、同一母岩を認定することや接合資料を見出



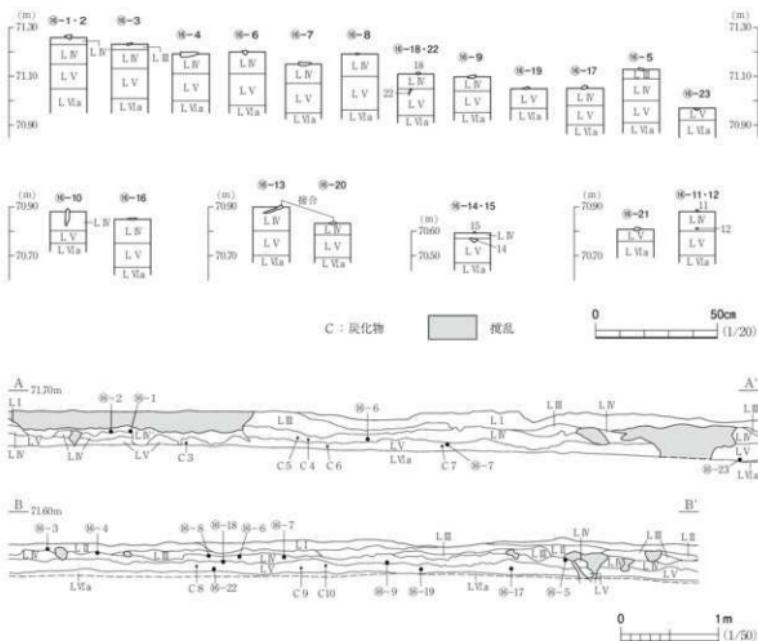


図15 旧石器出土状況柱状図・断面図

すことはできなかった。

図16-1は珪質頁岩製の切出形ナイフ形石器で、厚みのある横長剥片を素材とする。素材の打面は腹面左側縁にわずかに残る。背面右側縁下部に対向調整による加工があるが、背面側からの方が優勢である。背面左側縁の先端部側の加工は急斜であるが、入念な加工ではない。ただ、その加工痕周辺は磨耗により、光沢を帯びる。先端部は極状に剥離しており、衝撃剥離の可能性が高い。

2は珪質頁岩製の抉り搔器で、背面下側縁中央に急斜な角度の加工を施し、抉り部を作り出している。抉り部の縁辺は、微細な剥離が連続して、プランティング状に潰れている。3は珪質頁岩製の鋸歯縁石器で、背面左側縁に刃部をもつ。これも刃縁は細かな剥離が並ぶ。素材自体はかなり薄手で、打面部側は折損している。

4は珪質頁岩製の拇指形の厚みのある剥片で、背面下端部に微細剥離が観察される。背面右半部の剥離面はポジティブ面で、その上部に打撃錐や打撃痕をとどめる。この剥片の腹面は打瘤がまとまっていて、2.5mmほどの打撃錐の発達もみる。5は珪質頁岩製の継長の剥片で、背面右側縁に連続した微細剥離が観察される。打面部は新しい剥離により失われているが、側縁の形状からすると点状打面に近いものと推察される。打瘤部はあまり発達していないので、先ほどの4の資料とは剥

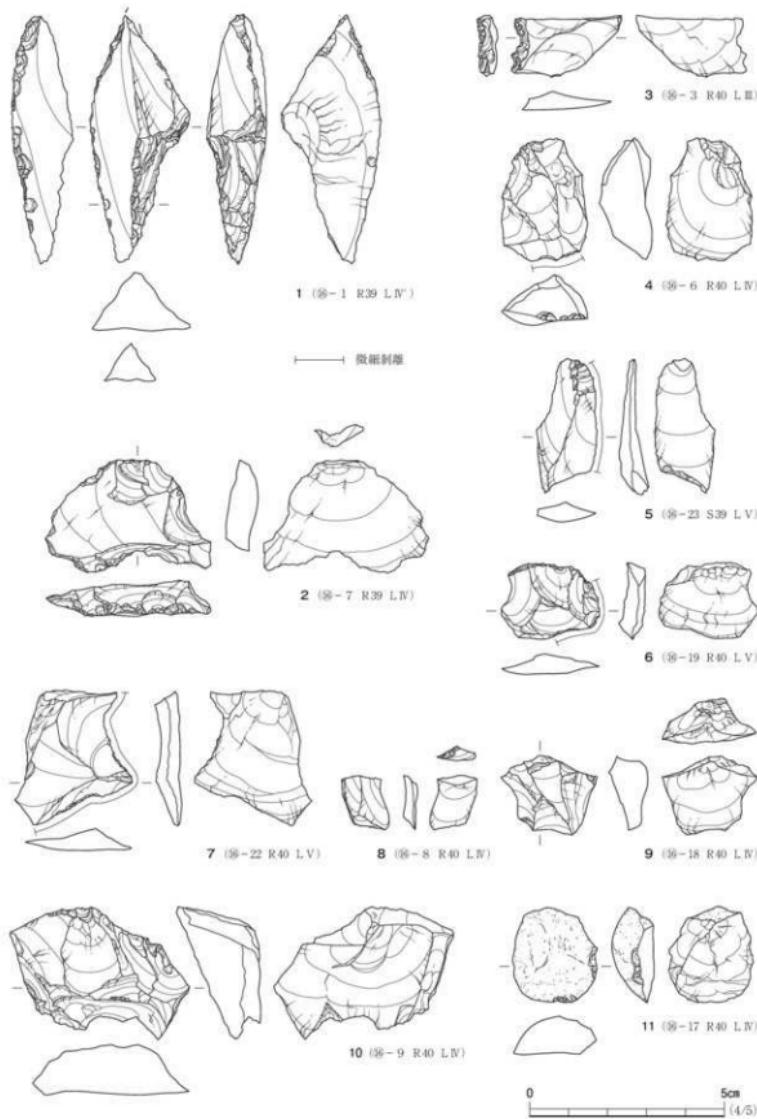


図16 6号ブロック出土旧石器（1）

離の技術が異なるようである。

6は縞メノウ製の微細剝離のある剥片で、背面右側縁から下側縁にかけて細かな剝離が観察される。打面縁にも細かな剝離が連続してみられるが、調整によるものか、使用痕跡か判断できない。腹面側の打撃錐付近は、石質が影響しているのか、かなり複雑な割れ方をしている。7も縞メノウ製の微細剝離のある剥片で、背面右側縁から下側縁にかけて細かな剝離が観察される。剝離角が70度とかなり変則的な割れが生じたためか、打撃錐の直下から縱方向にねじながら剝離が進行している。

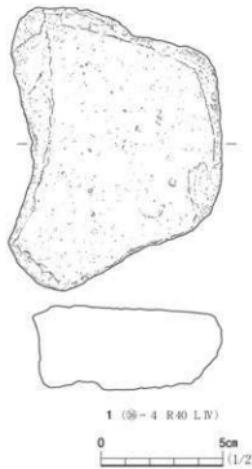
8は縞メノウ製の小形剥片で、打面部に石核調整痕が観察される。9は縞メノウ製の剥片で、背面の打瘤頂部付近で、「く」の字に折れ曲がった蝶番状剝離を見せる。打面は上面図の上端の、幅9mmほどの小さな剝離面で、中央に打撃痕が観察される。10は縞メノウ製の厚みのある剥片 図17 6号ブロック出土旧石器（2）で、打面縁は細かく潰れている。打面の中央には打撃痕が観察されるが、それより左側は剝離時に同時割れが生じて失われている。おそらく石理の影響によるものだろう。背面の剝離構成は多方向からであり、剝離の末端は階段状を呈するものが多い。11はチャート製の剥片で、縁辺の一部は潰されている。背面は円礫面である。脈が多い石質のためか、腹面は打撃錐付近から不規則な割れが生じている。

図17-1は、花崗閃緑岩製の台石である。図示した面の中央が平滑である。肉眼での観察では、目立った使用的痕跡は認められない。

**ブロック外出土の石器**（図18、写真15） 図18-1は珪質頁岩製の二側縁加工のナイフ形石器である。細身の石刃を素材とし、背面に右側縁下半と左側縁上半に急斜な整形剝離を施している。特に右側縁下半のものは、最終的にはプランティング状の加工を施し、形を整えている。基部への加工は背面左側縁下端から腹面側にかけて、さらに腹面に対しても調整が施されている。このことで基部は横断面が丸みを帯びる。背面に右側縁上半が刃部で、微細剝離が認められる。先端部は一方向からの衝撃により、割れている。

2は珪質頁岩製の搔削器で、調整打面から剝離された縦長剥片を素材としている。剥片末端部に急斜な整形剝離を施し、刃部を作出している。背面右側縁には不規則ながらも調整剝離痕が観察される。それら以外のほとんどの縁辺には、微細剝離が観察される。剥片の末端は一部で蝶番状を呈するが、その部分のみ加工痕が見られない。

3は珪質頁岩製の石刃で、2点の接合資料（折れ面接合）である。打面幅は11mmと小さいが、末端部の幅が54mmと拡がる形状である。打面厚が薄い単剝離面打面で、打瘤も小さくまとまっている。



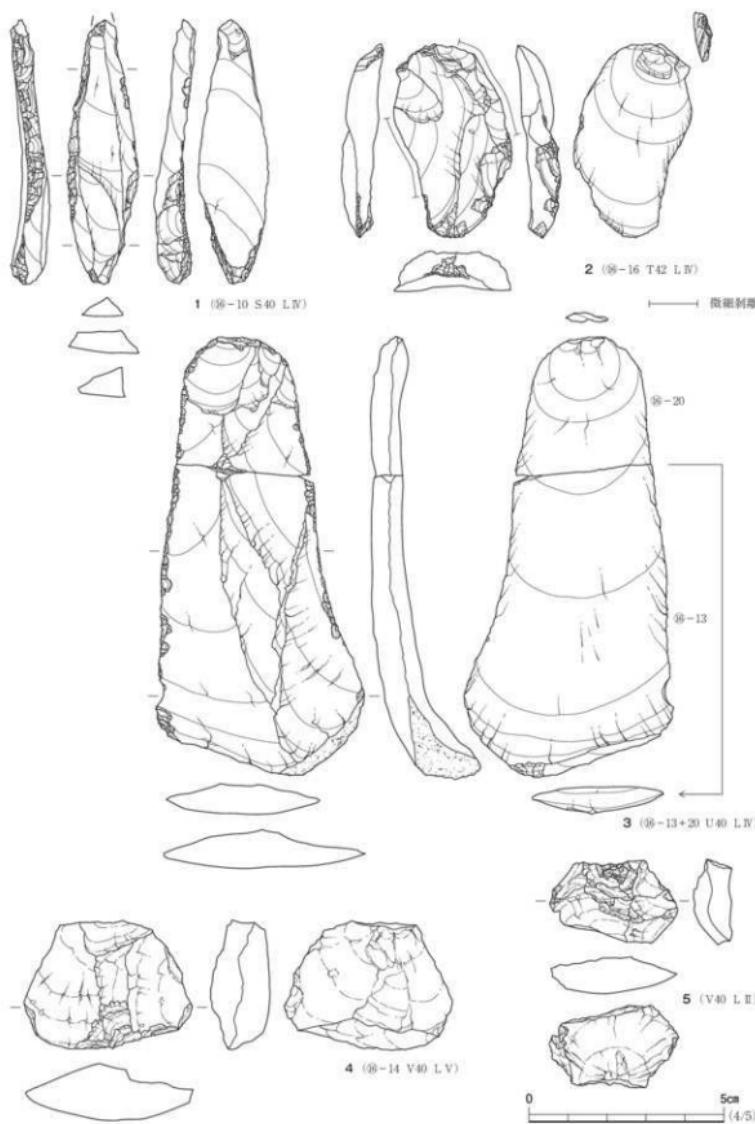


図18 ブロック外出土旧石器

表2 旧石器観察表

採上 No	國 No	出土位置(國土座標)			ダリ アド	層 位	プロ タク	器 種	石 材	全体(mm)			重さ (g)	打面(mm) 幅 厚さ	打面 形状	剥離角 (°)	末端 形状
		X	Y	Z						長さ	幅	厚さ					
96-1	16-1	143010.145	102174.655	71.267	R39	LIV	6	Kn.	SSh	63.5	25.0	15.0	14.0	(3.7) (0.8)	-	-	羽
96-2		143010.126	102174.544	71.229	R39	LIV	6	F.	Ch.	6.3	16.4	3.8	6.4	-	-	-	矢
96-3	16-3	143007.525	102174.239	71.226	R40	LIV	6	NS.	SSh	14.8	27.9	5.2	19	-	-	欠	- 羽
96-4	17-1	143006.803	102174.356	71.194	R40	LIV	6	A.S.	Gr.	115.4	84.4	3.0	47.1	-	-	-	-
96-5		143004.035	102178.294	71.129	R40	LIV	6	F.	Rh.	23.8	28.2	10.4	41	-	-	欠	- 矢
96-6	16-4	143009.659	102177.630	71.199	R40	LIV	6	M.F.	SSh	30.1	22.3	14.1	8.1	19.6	7.4	複	124 羽
96-7	16-2	143009.970	102178.344	71.149	R39	LIV	6	NS.	SSh	29.0	41.9	8.7	8.3	12.5	4.9	單	100 羽
96-8	16-8	143005.837	102175.109	71.187	R40	LIV	6	F.	B.Ag	13.6	11.3	4.3	0.5	9.3	4.3	調	108 羽
96-9	16-10	143004.904	102176.636	71.100	R40	LIV	6	F.	B.Ag	36.1	43.5	19.3	20.9	37.0	17.7	複	117 羽
96-10	18-1	143002.837	102188.191	70.874	S40	LIV	外	Kn.	SSh	67.4	18.2	7.2	9.1	-	-	缺	- 羽
96-11		143000.077	102225.126	70.888	W37	LIV	外	C.	Ch.	8.5	7.9	6.1	0.3	27	1.6	複	103 羽
96-12		143027.737	102225.376	70.810	W38	LIV	外	F.	Rh.	82	12.3	50	0.3	-	-	欠	- 矢
96-13	18-3	143006.955	102204.588	70.905	U40	LIV	外	Bl.	SSh	81.4	53.7	7.3	47.6	-	-	欠	- カット
96-14	18-4	143005.092	102217.447	70.575	V40	LIV	外	F.	Rh.	32.4	42.2	15.1	15.6	20.5	9.3	單	97 雷
96-15		143005.701	102216.280	70.593	V40	LIV	外	C.	Rh.	6.5	5.6	4.3	0.1	-	-	欠	- 矢
96-16	18-2	142999.354	102192.105	70.853	T42	LIV	外	E.S.	SSh	44.3	35.8	7.5	9.3	13.4	4.7	調	100 雷
96-17	16-11	143007.749	102179.617	71.048	R40	LIV	6	F.	Ch.	23.4	21.9	11.0	6.3	14.3	8.7	複	118 羽
96-18	16-9	143006.134	102175.503	71.114	R40	LIV	6	F.	B.Ag	18.5	24.3	13.7	4.2	9.0	7.1	複	85 雷
96-19	16-6	143006.258	102177.927	71.051	R40	LIV	6	M.F.	B.Ag	18.7	25.5	5.1	2.4	22.1	5.7	單	116 雷
96-20	18-3	143006.041	102204.397	70.857	U40	LIV	外	Bl.	SSh	31.0	34.3	7.3	9.2	11.4	2.0	單	113 矢
96-21		143006.670	102194.402	70.806	T40	LIV	外	F.	Rh.	26.3	29.7	15.6	9.0	20.4	3.7	複	110 雷
96-22	16-7	143006.200	102175.560	71.064	R40	LIV	6	M.F.	B.Ag	34.0	29.7	6.6	5.0	29.0	6.8	單	70 羽
96-23	26-5	143012.632	102180.490	70.968	S39	LIV	6	F.	SSh	34.1	15.3	5.3	2.0	-	-	欠	-
-	18-5	-	-	-	V40	LIV	外	F.	Rh.	20.8	32.1	8.4	5.1	17.7	4.7	單	112 羽

接合資料

96-(13-20)	U40	LIV	外	Bl.	SSh	112.4	53.7	11.2	56.2	11.4	20	單	113 カット
------------	-----	-----	---	-----	-----	-------	------	------	------	------	----	---	---------

## 【凡例】

国土地標は日本地図系第Ⅹ系による  
 器種: Kn.(backed knife: ナイフ形石器), S.S. (side scraper: 両端),  
 ES. (end scraper: 楊器), NS. (notched scraper: 入れ楊器),  
 Bl. (blade: 石刃), M.F. (micro-faking flake: 微細剥離のある剝片),  
 F. (flake: 片), C. (chip: 砕片), A.S. (anvil stone: 台石)

石材: SSh. (siliceous shale: 珠質頁岩), Ch. (chert: チャート),  
 B.Ag (banded agate: 紋メカ), Rh. (rhylolite: 流紋岩),  
 Gr. (granofeldite: 花崗閃綠岩)

打面形状: 単(單側面打面), 植(複側面打面), 調(調整打面),  
 斜(傾斜面打面), 欠(欠刻), 除(除去)

末端形状: 羽(羽毛状剥離), 雷(雷状剥離), 売(椎状剥離),  
 小(小), カット(カットラバッセ)

## 【石器用例】

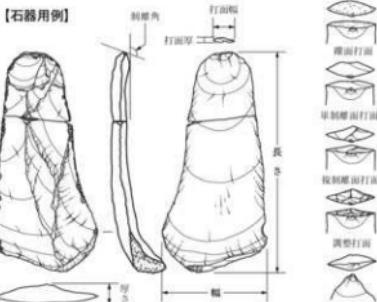


表3 炭化物法量表

採上 No	出土位置(國土座標)			ダリ アド	層 位	プロ タク	試料 状態	全体(mm)			重さ (g)	¹⁴C 年代測定 分析番号	
	X	Y	Z					長さ	幅	厚さ		打面	剥離角
96-C1	143027.703	102230.542	70.971	W38	LIV	外	炭(乾燥)	9.0	4.5	4.0	0.036	FB-OYUH-01	
96-C2	142999.383	102193.732	70.792	T41	LIV	外	炭(乾燥)	10.5	6.5	4.2	0.046	FB-OYUH-02	
96-C3	143009.122	102175.928	71.144	R40	LIV	6	炭(乾燥)	7.5	2.5	0.6	0.006		分析外
96-C4	143009.684	102176.983	71.123	R40	LIV	6	炭(乾燥)	4.2	2.0	1.4	0.005	FB-OYUH-04	
96-C5	143010.652	102176.490	71.131	R29	LIV	6	炭(乾燥)	3.0	2.0	0.8	0.025		分析外
96-C6	143011.218	102176.579	71.135	R29	LIV	6	炭(乾燥)	7.0	5.1	2.1	0.020	FB-OYUH-03	
96-C7	143011.597	102177.710	71.136	R29	LIV	6	炭(乾燥)	4.5	3.0	1.2	0.026		分析外
96-C8	143005.820	102175.314	71.102	R40	LIV	6	炭(乾燥)	4.5	2.0	1.6	0.003	FB-OYUH-06	
96-C9	143005.929	102176.351	71.009	R40	LIV	6	炭(乾燥)	6.0	2.5	1.4	0.021		分析外
96-C10	143006.841	102177.078	71.050	R40	LIV	6	炭(乾燥)	8.0	8.0	4.1	0.061	FB-OYUH-08	
96-C11	143010.494	102182.972	71.026	S39	LIV	外	炭(乾燥)	3.5	2.0	0.8	0.001	FB-OYUH-09	
96-C12	143007.513	102192.975	70.870	T40	LIV	外	炭(乾燥)	7.3	6.5	1.8	0.041	FB-OYUH-05	
96-C13	143011.275	102188.341	71.007	S39	LIV	外	炭(乾燥)	12.8	10.2	5.5	0.179	FB-OYUH-07	
96-C14	-	-	-	S39	LIV	外	炭(乾燥)	9.0	7.5	0.9	0.038	FB-OYUH-10	

※分析番号は、次年度報告時に変更される可能性がある。

剥離の角度は113度を測る。背面の打面縁には刃漬し状の調整剥離がみられる。末端部はウートラバッセをなし、石核底面を取り込みながら肥厚している。背面の両側縁には1~2mm程度の微細剥離が連続して並ぶ。腹面右側縁下端には幅8mmほど抉り部があり、その縁辺は光沢を帯びる。

4は厚みのある流紋岩製の剥片で、打面部も厚く、末端部は蝶番状を呈する。背面下端部の中央は階段状に潰れているが、主要剥離面よりも新しい。この剥片の剥離時に下方向から衝撃が加わったのかもしれない。風化が著しく、器面は磨滅している。5は流紋岩製の剥片で、背面の打面縁は階段状に潰れている。下端部は折損している。

**石材組成** 珪質頁岩9点、チャート3点、矽メノウ5点、流紋岩6点、花崗閃綠岩1点(台石)となる。珪質に富んだ頁岩は、現在のところ、福島県の浜通り地方で産地は知られておらず、遠隔地石材と考えられる。珪質頁岩は、色調が灰黄褐色のもの(8点)と黒褐色のもの(1点)とがある。図18-3の背面下端には円礫面が残り、将来的には産地の推定に役立つかもしれない。

チャートやメノウ系の石材は、近隣の河川(木戸川や井出川)でも採取が可能であり、斑晶に富んだ流紋岩は双葉郡広野町からいわき市に分布する門平層で確認されており、比較的近隣で採取可能であったと推察される(第1章第2節の2参照)。また、斑晶に富んだ流紋岩製の石器に関しては、縄文時代を通じても、浜通り地方では北は双葉郡浪江町、南はいわき市までの遺跡に限定され、地域性が強い石材である。AT下位の石器群である1・2号ブロック(伊藤・山元ほか2001)は、全体の約2/3が流紋岩であるのに対し、本石器群の流紋岩の割合は2割弱と、それほど使用率は高くなない。むしろ本石器群の石材はチャートやメノウ系など、多様性に富むことが特徴のようである。

**炭化物** 旧石器と同じ層準から出土した炭化物は、14点である。地面が被熱した箇所等ではなく、炭化物が密集して出土することもなかった。炭化物の採り上げに関しては、周間に搅乱や風倒木痕がないかどうかの観察は十分に行った。しかしながら、細かな木根の落ち込みなどのコンタミネーションを避けられたかどうかは、今回の石器出土層準が旧地表面から約30~40cm下のところであり、実際は困難であったといわざるをえない。今後、放射性炭素年代測定の結果を検討した上で、14点の炭化物の評価を行う予定である。

**まとめ** 5次調査では、24点の旧石器が出土した。これらはLVを主体に出土した。過年度の調査の火山灰分析結果を参考にすれば、LVがAT層準であることから、現時点では本石器群はAT上位に位置付けておく。石器組成はナイフ形石器2点、搔削器類3点、石刃2点(接合資料につき実質1点)、微細剥離のある剥片3点、剥片11点、碎片2点、台石1点からなる。24点中8点が石器(ツール)であり、これに微細剥離のある剥片を加えると全体の半数弱(約46%)に加工痕もしくは微細剥離が認められることになる。製品率の高さや碎片や石核の少なさから考えると、本石器群は消費地遺跡での限定的(断片的)なあり方を示しているのではないだろうか。

### 3. 繩文時代以降の遺構

**概 要** 5次調査では、8基の土坑を検出した。調査区内では、規則的な配列があるわけではなく、散漫な分布をみせる。ほとんどが直径1～1.5mほどの円筒形の土坑であった。過年度の調査で数多く確認された、縄文時代の落し穴状土坑や古代の木炭焼成土坑は、今回の調査では見つからなかった。

8基の土坑から出土した遺物はなく、詳細な時期を特定できない。109号土坑では、L IIから遺構が掘り込まれており、その他の遺構もL IIを起因とする黒褐色シルトが遺構内に堆積していることが確認できる。したがってL II形成期、もしくはL IIが表土であった時に掘り込まれた土坑と推察される。過年度調査でL IIIから縄文時代早・前・後・晚期の土器が出土していることから、少なくともそれらの時期よりは新しい時期の所産と考えられるが、これ以上の時期の特定は困難である。以下、8基の土坑について述べる。なお、図19・20の土層の注記のなかで「混土」と表現したものについては、人為堆積を示す。それ以外は自然堆積である。

**109号土坑（SK 109、図19、写真12）** 本遺構は調査区南西部の境界壁付近、T 41グリッドで検出した。したがって、遺構のおおよそ半分は調査区外にあり、調査は行っていない。遺構の輪郭を確認できたのはL III上面であったが、境界壁での観察ではL II上面から掘り込んでいることが判明した。

調査を行った範囲では、平面形は円形を基調とする。上端での大きさは、東西方向の最大で150cm、南北方向は約80cmである。下端(底面)の規模は最大60cmほどであり、したがって断面形はすり鉢状をなす。壁の立ち上がりは緩く、40度程度である。掘込面から確認できる遺構の深さは70cmで、底面中央にピットが取り付き、さらに20cmほど掘り下がっている。

遺構内堆積土は8層に分けたが、ℓ 5～8までは自然堆積で、L IIを起因とする黒褐色シルト、L IIIを起因とする暗褐色シルトが主体である。ℓ 3・4は、L IIIを起因とする暗褐色シルト塊やL IV以下の層を起因とする褐色・粘土塊が多く含まれていたため、人為堆積と判断した。ℓ 1・2は、L IIを起因とする自然堆積である。

出土遺物はなく、詳細な時期や遺構の性格等は不明である。

**110号土坑（SK 110、図19、写真12）** 本遺構は調査区西部の、S 40グリッドで検出した。遺構のおおよその輪郭を確認できたのはL III上面であったが、輪郭の確定に至ったのはL IV上面である。

平面形は形の整わない、ゆがんだ円形を呈する。上端での大きさは、東西方向で100cm、南北方向では86cmである。下端(底面)の規模は最大80cmであり、北壁や西壁ではほぼ垂直に壁が立ち上がっている。検出面から確認できる遺構の深さは、70cmであった。底面は凹凸があり、平面形状もゆがんだ円形で、丁寧に整えた感じではない。また、底面と東壁の境界はあいまいである。

遺構内堆積土は2層に分けたが、いずれもL IIIを起因とする暗褐色シルト塊やL IV以下の層を起因とする褐色・粘土塊が多く含まれていたため、人為堆積と判断した。

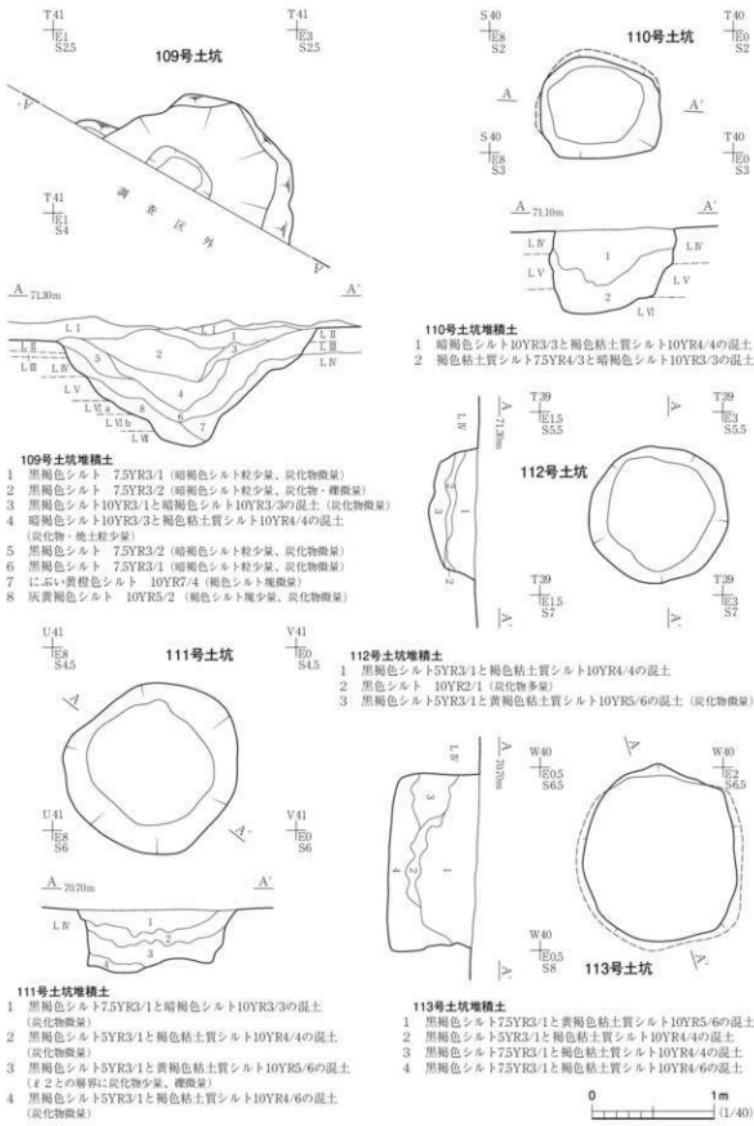


図19 109~113号土坑

出土遺物はなく、詳細な時期や遺構の性格等は不明である。

**111号土坑（SK 111、図19、写真12）** 本遺構は調査区南端部の、U 41グリッドで検出した。遺構のおおよその輪郭を確認できたのはL III上面であったが、輪郭の確定に至ったのはL IV上面である。

平面形は円形を呈する。上端での大きさは、東西方向で144cm、南北方向で140cmである。下端（底面）の規模は最大106cmであり、周囲の壁は垂直に近い角度で立ち上がっている。検出面から確認できる遺構の深さは、52cmであった。底面は東から西に向かってやや傾斜があるが、それほど凹凸はなく、丁寧に整えた感じである。また、底面と周壁の境界は明瞭である。

遺構内堆積土は4層に分けたが、いずれもL IIを起因とする黒褐色シルト塊やL IV以下の層を起因とする褐色・黄褐色粘土塊が多く含まれていたため、人為堆積と判断した。

出土遺物はなく、詳細な時期や遺構の性格等は不明である。

**112号土坑（SK 112、図19、写真12）** 本遺構は調査区西部北寄りの、T 39グリッドで検出した。遺構のおおよその輪郭を確認できたのはL III上面であったが、確定に至ったのはL IV上面である。

平面形は円形を呈する。上端での大きさは、東西方向で115cm、南北方向で113cmである。下端（底面）の規模は最大94cmであり、周囲の壁は急な角度で立ち上がっている。検出面から確認できる遺構の深さは、38cmであった。底面は中央に向かってややくぼんでいるが、それほど凹凸はなく、丁寧に整えた感じである。また、底面と周壁の境界は明瞭である。

遺構内堆積土は3層に分けたが、いずれもL IIを起因とする黒褐色シルト塊やL IV以下の層を起因とする褐色・黄褐色粘土塊が多く含まれていたため、人為堆積と判断した。

出土遺物はなく、詳細な時期や遺構の性格等は不明である。

**113号土坑（SK 113、図19、写真13）** 本遺構は調査区東部中央の、W 40グリッドで検出した。遺構のおおよその輪郭を確認できたのはL III上面であったが、輪郭の確定に至ったのはL IV上面である。

平面形は円形を呈する。上端での大きさは、東西方向で127cm、南北方向で146cmである。下端（底面）の規模は最大144cmであり、周囲の壁は垂直もしくは下の方が抉れぎみに立ち上がっている。検出面から確認できる遺構の深さは、72cmであった。底面は平坦で、丁寧に整えた感じである。また、底面と周壁の境界は明瞭である。

遺構内堆積土は4層に分けたが、いずれもL IIを起因とする黒褐色シルト塊やL IV以下の層を起因とする褐色・黄褐色粘土塊が多く含まれていたため、人為堆積と判断した。

出土遺物はなく、詳細な時期や遺構の性格等は不明である。

**114号土坑（SK 114、図20、写真13）** 本遺構は調査区中央やや北寄りの、T 39・U 39グリッドで検出した。遺構のおおよその輪郭を確認できたのはL III上面であったが、輪郭の確定に至ったのはL IV上面である。

平面形は円形を呈する。上端での大きさは、東西方向で120cm、南北方向も120cmである。下端（底面）の規模は最大120cmであり、周囲の壁は垂直ぎみに立ち上がっている。検出面から確認でき

る遺構の深さは、75cmであった。底面は西から東に向かって若干、傾斜しているが、凹凸はなく、丁寧に整えた感じである。また、底面と周壁の境界は明瞭である。

遺構内堆積土は5層に分けたが、いずれもL IIを起因とする黒褐色シルト塊やL IV以下の層を起因とする褐色・黄褐色粘土塊が多く含まれていたため、人為堆積と判断した。

出土遺物はなく、詳細な時期や遺構の性格等は不明である。

**115号土坑** (SK 115、図20、写真13) 本遺構は調査区中央やや北寄りの、V 38・39グリッドで検出した。遺構のおおよその輪郭を確認できたのはL III上面であったが、輪郭の確定に至ったのはL IV上面である。

平面形は円形を呈する。上端での大きさは、東西方向で126cm、南北方向も126cmである。下端(底面)の規模は最大128cmであり、周囲の壁は垂直、もしくは下の方が抉れぎみに立ち上がっている。検出面から確認できる遺構の深さは、45cmであった。底面は平坦で、丁寧に整えた感じである。また、底面と周壁の境界は明瞭である。

遺構内堆積土は3層に分けたが、いずれもL IIを起因とする黒褐色シルト塊やL IV以下の層を起因とする褐色・粘土塊が多く含まれていたため、人為堆積と判断した。

出土遺物はなく、詳細な時期や遺構の性格等は不明である。

**116号土坑** (SK 116、図20、写真13) 本遺構は調査区中央やや北寄りの、V 39グリッドで検出した。遺構のおおよその輪郭を確認できたのはL III上面であったが、輪郭の確定に至ったのはL IV上面である。

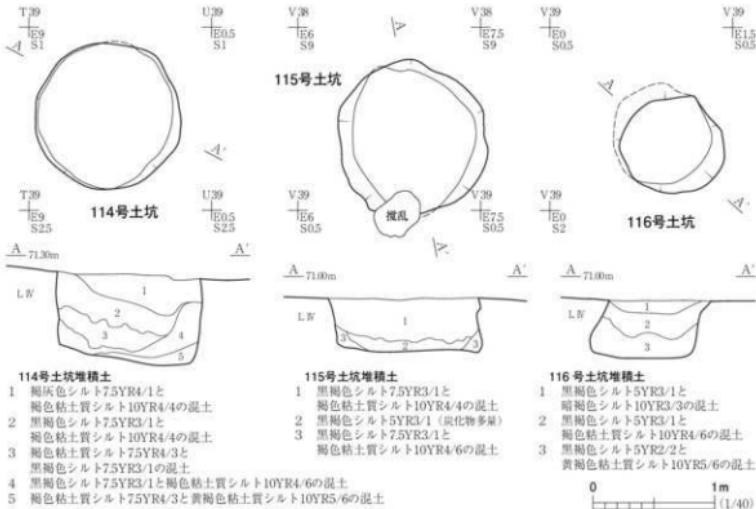


図20 114~116号土坑

平面形はほぼ円形を呈する。上端での大きさは、東西方向で87cm、南北方向で78cmである。下端(底面)の規模は最大82cmであり、周囲の壁は垂直、もしくは下半部が抉れぎみに立ち上がっている。検出面から確認できる遺構の深さは、48cmであった。底面は平坦で、丁寧に整えた感じである。また、底面と周壁の境界は明瞭である。

遺構内堆積土は3層に分けたが、いずれもL IIを起因とする黒褐色シルト塊やL IV以下の層を起因とする褐色・黄褐色粘土塊が多く含まれていたため、人為堆積と判断した。

出土遺物はなく、詳細な時期や遺構の性格等は不明である。

#### 4. 遺構外出土遺物(図21)

旧石器時代の遺物を除く遺構外出土遺物は、縄文土器1点と磨石1点である。縄文土器は1cm四方に満たない小片で、磨滅が著しく、図示できなかった。

図21-1は石英斑岩製の磨石で、やや扁平な円盤を利用している。表面中央と側面の一部が潰れている。

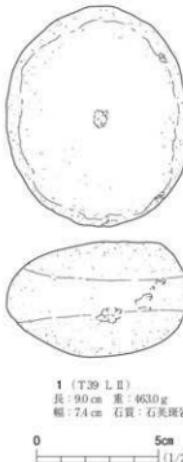


図21 遺構外出土石器

#### 引用文献

伊藤典子・山元 出江 2001 「大谷上ノ原遺跡(1次調査)」「常磐自動車道跡調査報告26」福島県教育委員会  
(財)福島県文化センター

### 第3章 まとめ

本遺跡では常磐自動車道建設に伴い、過去4回の本発掘調査を実施している。各調査対象面積は、平成11年度の1次調査13,000m<sup>2</sup>、続く平成12年度の2次調査10,600m<sup>2</sup>、平成20年度の3次調査7,000m<sup>2</sup>、平成22年度の4次調査1,800m<sup>2</sup>である。そして今回、5次調査として1,700m<sup>2</sup>の本発掘調査を行ったので、本遺跡では合計34,100m<sup>2</sup>の本発掘調査を行ったことになる。各調査の結果、本遺跡は旧石器時代、縄文時代、平安時代の遺構や遺物を確認することができ、複合遺跡であることが判明した。本章では、時代ごとに調査成果を概観する。

**旧石器時代** 本遺跡では、合計665点の旧石器時代に比定される石器が出土した。これまでの調査で、6か所の石器ブロックと1基の礫群を確認した。この内、1・2号ブロックは基部加工のナイフ形石器(図23-13)や台形石器(図23-14)、刃部磨製石斧(図23-15)を含むことからAT下位の石器群と考えられ、3～5号ブロックは尖頭器(図23-1・2)や大形石刃素材の彫器(小坂型に類似、図23-3)を含むことからAT上位の石器群(立川ロームIV層上部～III層段階相当)と考えられている(山元ほか 2002)。

今回の5次調査では、24点の旧石器がLⅡからLⅤにかけて出土したが、主体はLⅣからである(LⅡ：1点、LⅢ：2点、LⅣ：16点、LⅤ：5点)。過年度の火山灰分析の結果を参照にすれば、浅間板鼻黄色軽石(LⅢ)とAT(LⅤ)の間から出土した可能性が高い。

次に過年度の調査資料との出土層位の比較であるが、1次調査の1号ブロック(135点)の石器はLⅣからLⅤにかけての出土で、AT降灰層準であるLⅤに主体的に含まれるものと認識できる。刃部磨製石斧の共伴関係から、AT下位の石器群と考えるのが妥当である。ただ、LVIをAT下位の「暗色帶」相当と認識するのであれば、逆にそこから石器がほとんど出土しないという事実も指摘しておかねばならない。2号ブロック(114点)の出土層準も1号ブロックと同じで、LⅤを主体としており、AT下位の石器群と考えるのが妥当である。

2次調査の発掘時の所見では、3号ブロック(245点)はLⅢ下部からLⅣ上部にかけて剥片類の密集が認められ、LⅤ上部まで分布が続くとしている。4号ブロック(7点)は大形石刃のみで構成され、出土層準はLⅣ上部から中部にかけてと考えられる。5号ブロック(6点)は5点がLⅣからの出土で、そのなかでの接合関係がある。以上のことから、3～5号ブロックはLⅣを主体に出土し、AT降灰層準よりも上位であることは明らかである。

さて今回、出土した6号ブロックの石器であるが、切出形ナイフ形石器(図16-1)の存在から、AT直後の石器群と考えられる。この石器は、まず素材が分厚い横長剥片を選択していること、刃縁と器軸が40度程度で交わること、打面を除去するような加工を行っていること、その加工が内湾ぎみの整形剥離であることなど、「切出形」とよぶにふさわしい特徴を備えている。

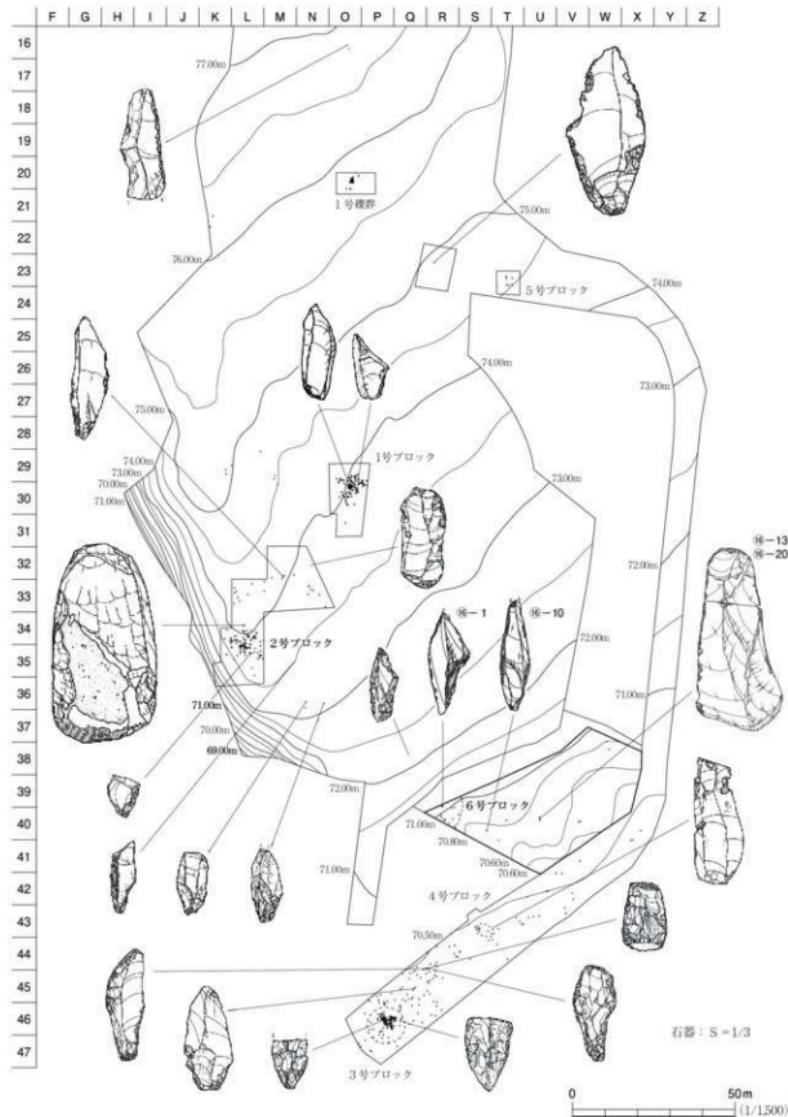


図22 1～5次調査旧石器出土分布図

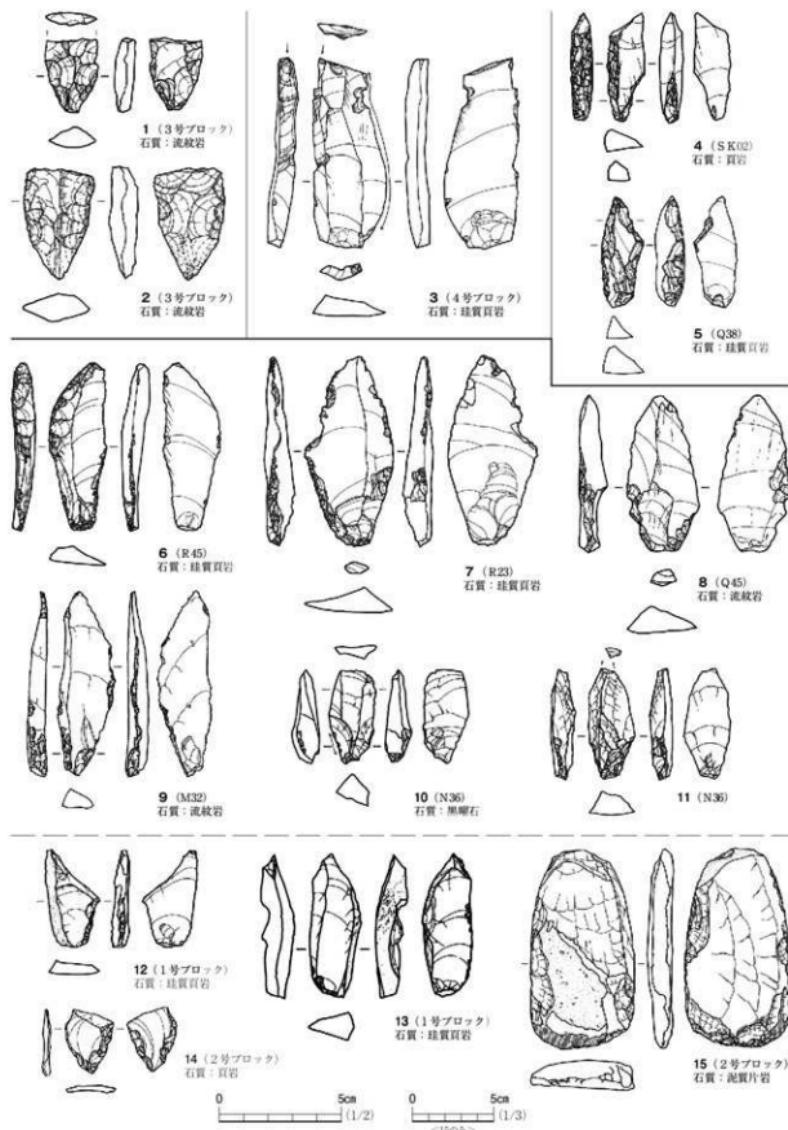


図23 大谷上ノ原遺跡旧石器集成図

ただ整形加工は背面右側縁の加工が主体であり、その加工も背面側からの加工が優勢である。また、刃縁と対する背面左側縁の加工は部分的にとどまっている。それらの点で典型的な「切出形」とは異なる点もある。しかしながら石刃石器群を主体とする東北地方においては、むしろ横長剥片を素材とするナイフ形石器であることを「切出形」として積極的に評価すべきかと考える。

かつて郡山市の弥明遺跡を調査した山内幹夫は、報告書で切出形ナイフ形石器や角錐状石器、さらに円形搔器が存在することなどから、立川ロームV層～IV層下部段階に位置付けた(山内ほか 1992)。この組成的特徴はAT直後の石器群、特に九州から関東に至る石器群では編年示準となっており、本石器群も同時期の所産と考えて、ほぼ問題はないだろう。

さて、6号ブロックの石器には、図16-2や3のように、鋸歯状の分厚な刃部を有する搔器がある。これは弥明遺跡の円形搔器の刃部にもある加工方法で、全国的にみてもこの時期の円形搔器の特徴のようである。本遺跡例はこのような典型例とはいえないが、鋸歯縁加工がある石器があることを注視したい。

次に着目すべきは、図18-1のブロック外から出土した、石刃素材の二側縁加工のナイフ形石器である。柳葉形を呈する点、素材の打面部を除去している点で「杉久保型」的ともいえる。しかしながら基部は尖鋭ではなく、腹面側にも平坦剥離が施されている。このため、茎部の横断面形は丸みを帯びるのが特徴的である。

東北地方のナイフ形石器の属性分析をした沢田敦は、「新潟県の杉久保石器群は(厚みの)中央値が5mm未満で・・・、AT上位のさらに後半の石器群で(厚さの)数値、偏差とも小さい傾向がある」とした(沢田 2006)。その点で本遺跡例(7.2mm)や弥明遺跡例(5.5mm)の二側縁加工のナイフ形石器は素材が分厚く、「杉久保型」の典型例とは異なる。特に弥明遺跡例は基部に点状の打面を残す形態であることから、「金谷原型」の範疇に含まれるのではないかとの指摘がなされている(柳田 2015)。

これらの指摘から図18-1のナイフ形石器を判断した場合、「金谷原型」の類似した形態と考えることができ、編年的にはAT直後の石器群に位置付けるのが妥当である。

図23に本遺跡の主要な旧石器を集成した。ナイフ形石器の形態は、大・中形石刃素材とした基部に打面を残すA類と、入念な整形加工を加え打面を除去したB類に大きく分けられる。A類はさらに基部加工のみのA1類(図23-10・13)と基部加工に加え側縁にプランディング加工を施すA2類(図23-6・9)、入念な整形加工により基部形態が逆「ハ」の字状に開くA3類(図23-7・8・11)に細分できる。B類は片側の側縁に抉りが入る「切出形」のB1類(図16-1、図23-4・5)、二側縁加工を施し「柳葉形」を呈するB2類(図18-1)に細分できる。これらの形態を素材の整形度合いで並べると、少ない方からA1類→A2類→A3類→B1・2類となり、特にB1・2類はプランディングや平坦剥離、対向剥離などの整形が多用される。

これまでの本県の研究ではAT下位の石器群において、A1類→A3類の変遷が考えられてきたが(柳田 1995)、本遺跡では層位的にこれを裏付ける根拠は見いだせない。ただ、平面分布の上では、1・2号ブロックからA1類のナイフ形石器(図23-13)と台形様石器(図23-14)、刃部磨

製石斧(図23-15)が出土している。そこから南東へ約100m離れたQ45グリッド付近で、A2類(図23-6)とA3類(図23-8)のナイフ形石器と削器2点がまとまって出土している。この石器のまとまりを新たにブロックに認定し、1・2号ブロックとの時期差を見いだすかどうかは、今後の課題である。

また、本遺跡の石器群の編年的位置付けについては、火山灰分析や放射性炭素年代の結果を得たあとに、改めて検討する必要がある。今後は過年度の資料も含めて、各ブロックの石器群と「暗色帶」との相対的な位置関係を明らかにし、石器群の変遷を再検討したいと考えている。

**縄文時代** これまでの調査で、縄文時代前期前葉の竪穴住居跡8軒と中期中葉の竪穴住居跡1軒が見つかっている。本遺跡では、前期前葉の住居跡は、すぐ脇が段丘崖となるような台地の西の縁辺部で数軒ずつがまとまって見つかっている。この内、J26グリッドで見つかった1号住居跡は長楕円形を呈する長辺7.5mの大型竪穴建物で、床面中央の長軸線上に炉が2基配列されるものである。ただし、柱穴の配列に規格性がないため、前期中葉に規格化する長方

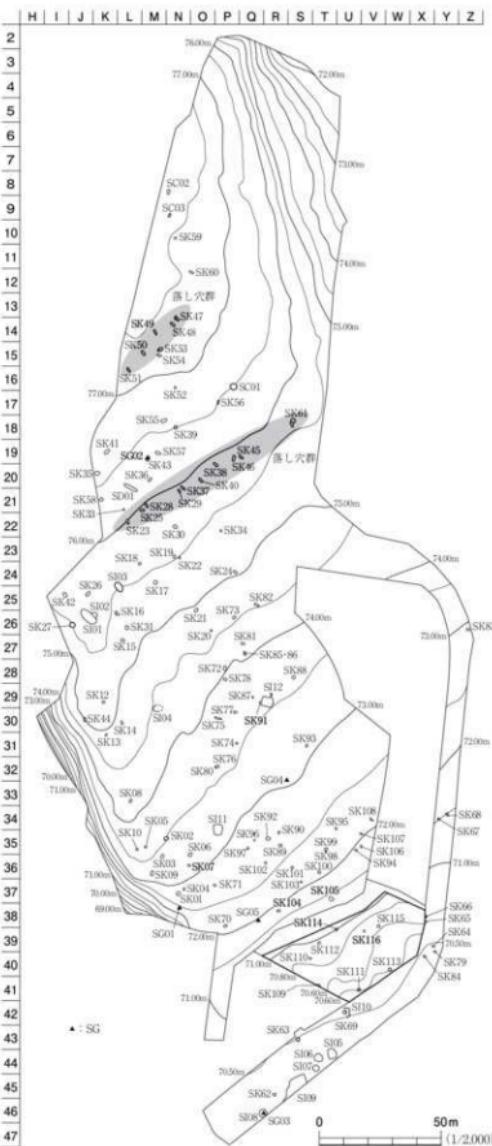


図24 1～5次調査構造配置図

形大型堅穴建物の前段階のものと指摘されている(伊藤・山元ほか 2001)。

台地の中央寄りの平坦面では、貯蔵穴や落し穴と考えられる土坑も多数確認されている。この内、落し穴状土坑では23・25・28・29・37・38・40・45・46・61号土坑からなる1列と、47~51号土坑からなる1列が等高線に沿って配列されている状況が見られ、各列は同時期に有意なつながりをもって機能していたと考えられている(伊藤・山元ほか 2001)。今回の調査では、落し穴と考えられる土坑はなかった。また、出土遺物がまったくないので、今回の調査で確認した土坑を、縄文時代の所産とは断定できない。

**平安時代** この時期の遺構は、3軒のカマドを有する堅穴住居跡と多数の木炭焼成土坑が見つかっている。3軒の住居跡の時期は、9世紀代に収まるものと考えられているが、若干の時期差があるようである(佐藤ほか 2009)。広大な台地の規模からすると、小規模な集落が営まれていたものと推察される。これまでの調査で、本遺跡では21基の木炭焼成土坑が見つかっている。この内、95号土坑から出土した木炭2点で放射性炭素年代値( $1,200 \pm 30$ yrBP,  $1,290 \pm 30$ yrBP)が得られており、住居跡の時期と大きく矛盾はしない。なお、本遺跡では製鉄関連の遺構や遺物は見つかっていないが、南に隣接する大谷山根遺跡(小暮ほか 2002)では製鉄関連遺物が出土し、9世紀代前半の堅穴住居跡には鍛冶炉が伴う。したがって周辺の遺跡ではこの時期に鉄生産が行われていたと推察できるが、本遺跡では現在のところ、製鉄遺構は確認されていない。

## 引用文献

- 伊藤典子・山元 出ほか 2001 「大谷上ノ原遺跡(1次調査)」「常磐自動車道遺跡調査報告26」福島県教育委員会  
 (財)福島県文化センター
- 大波紀子 2010 「大谷上ノ原遺跡(4次調査)」「常磐自動車道遺跡調査報告65」福島県教育委員会  
 (財)福島県文化振興事業団
- 小暮伸之ほか 2002 「大谷山根遺跡」「常磐自動車道遺跡調査報告31」福島県教育委員会 (財)福島県文化振興事業団
- 佐藤 啓ほか 2009 「大谷上ノ原遺跡(3次調査)」「常磐自動車道遺跡調査報告56」福島県教育委員会  
 (財)福島県文化振興事業団
- 沢田 敦 2006 「東北日本石刀石器群におけるナイフ形石器の検討」「東北日本の石刀石器群」東北日本の旧石器文化を語る会
- 柳田俊雄 1995 「会津若山原遺跡の旧石器時代石器群の研究」「郡山女子大学紀要」第31集第2号 郡山女子大学
- 柳田俊雄 2015 「日本列島の東北地方と九州地方における後期旧石器時代石器群編年と比較研究」
- 山内幹夫ほか 1992 「弥明遺跡」「母畠地区遺跡発掘調査報告32」福島県教育委員会 (財)福島県文化センター
- 山元 出ほか 2002 「大谷上ノ原遺跡(2次調査)」「常磐自動車道遺跡調査報告31」福島県教育委員会  
 (財)福島県文化振興事業団

# 写 真 図 版





1 遺跡遠景（南西から）



2 遺跡遠景（北から）



3 遺跡遠景

a 道路遠景（北西から）  
b 道路遠景（東から）  
c 道路遠景（南から）  
d 道路遠景（西南から）  
e 調査区全景（上空から）



4 5次調査区全景（北東から）



5 5次調査区全景（西から）



6 基本土層（1）

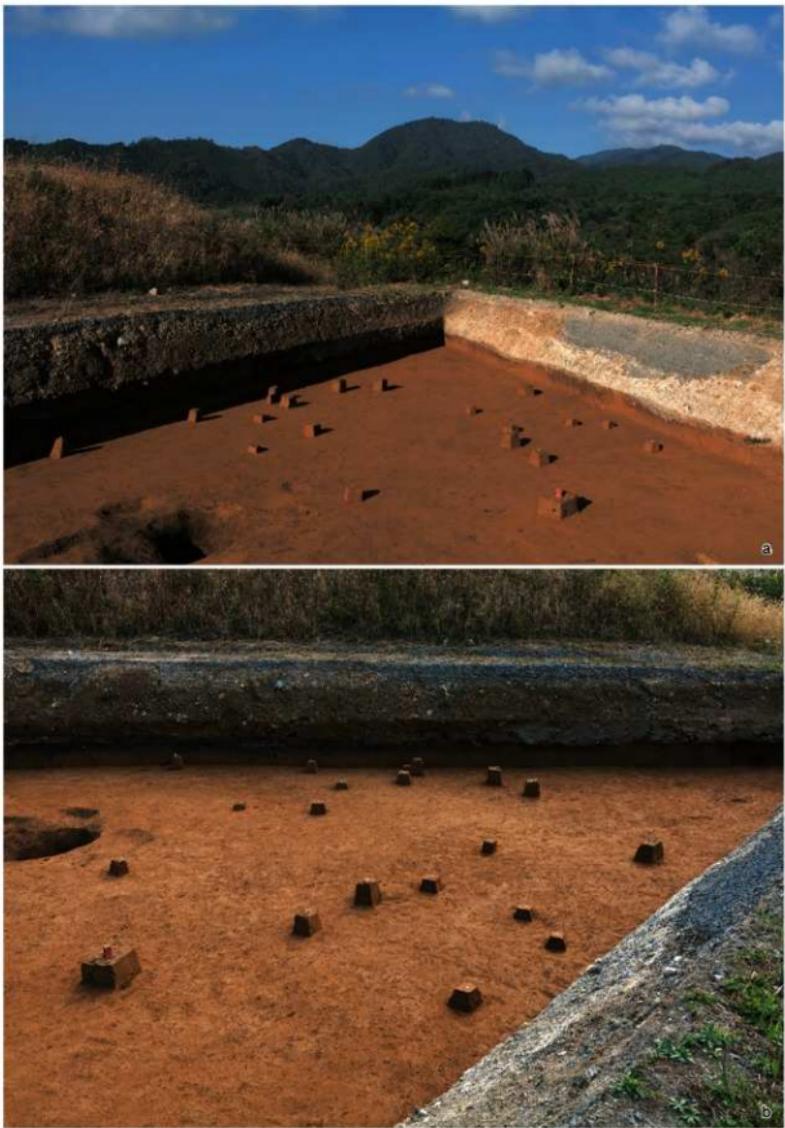
a 図12の③ (北東から)  
c 図11のC-C' (南西から)

b 図12の④ (東から)  
d 図12の⑤ (南西から)



7 基本土層（2）

a 図10のA A' (北東から)  
b 図10のA A' (南東から)  
c 図10のB B' (南東から)  
d 図10のB B' (南東から)



8 6号ブロック 全景

a 全景（東から） b 全景（北から）



9 6号ブロック全景・石器出土状況（1）

a 全景（東から）

翁 - 1 出土状況（北東から）

c 翁 - 3 出土状況（北西から）

e 翁 - 19 出土状況（西から）

b 全景（上空から）

d 翁 - 7 出土状況（北から）

f 翁 - 25 出土状況（北東から）

g 翁 - 22 出土状況（北から）



10 6号ブロック石器出土状況（2）

a ⑩-18出土状況（西から） b ⑩-17出土状況（西から）



11 ブロック外石器出土状況

a ⑩-10出土状況（南西から）

c ⑩-13出土状況断面（南東から）

e ⑩-16出土状況（南から）

b ⑩-12出土状況（南から）

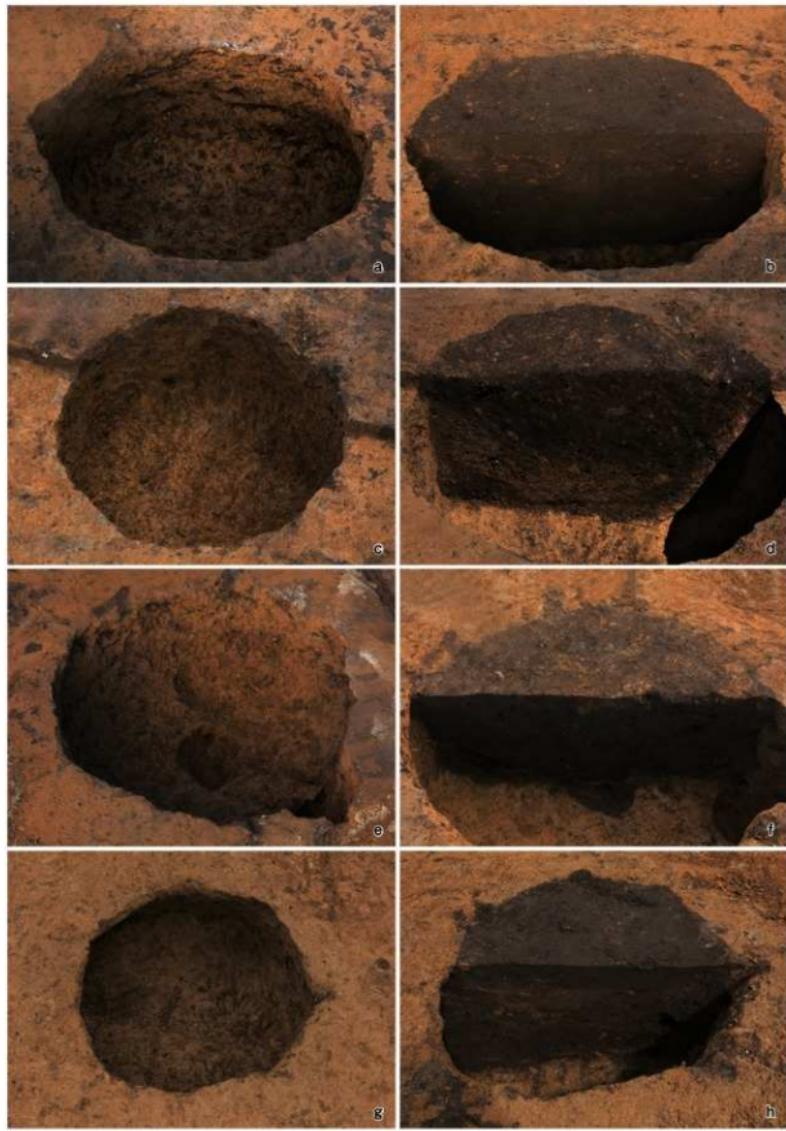
d ⑩-20出土状況（南から）

f ⑩-14出土状況（西から）



12 109～112号土坑

a 109号土坑突出（北東から）  
b 109号土坑完掘・断面（北東から）  
c 110号土坑完掘（南から）  
d 110号土坑断面（南から）  
e 111号土坑完掘（南西から）  
f 111号土坑断面（南西から）  
g 112号土坑完掘（西から）  
h 112号土坑断面（西から）



13 113～116号土坑

a 113号土坑完掘（南西から） b 113号土坑断面（南西から）  
c 114号土坑完掘（南西から） d 114号土坑断面（南西から）  
e 115号土坑完掘（西から） f 115号土坑断面（西から）  
g 116号土坑完掘（南西から） h 116号土坑断面（南西から）



14 6号ブロック出土旧石器



15 ブロック外出土旧石器

## 報告書抄録

ふりがな	じょうばんじどうしゃどういせきちょうさはうこく73							
書名	常磐自動車道遺跡調査報告73							
シリーズ名	福島県文化財調査報告書							
シリーズ番号	第520集							
編著者名	門脇秀典(編) 山田和史 佐藤俊 藤田克史							
編集機関	公益財団法人福島県文化振興財団 遺跡調査部 〒960-8115 福島県福島市山下町1-25 TEL 024-534-2733							
発行機関	福島県教育委員会 〒960-8688 福島県福島市杉妻町2-16 TEL 024-521-1111							
発行年月日	2017年3月24日							
所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	発掘面積m <sup>2</sup>	発掘原因
		市町村	遺跡番号					
大谷上ノ原 (5次調査)	福島県双葉郡楢葉町 大字大谷上ノ原・ 山根	07542	00089	37° 17' 11"	140° 58' 57"	2016.05.24 ~ 2016.07.21	1,700	記録保存調査
所収遺跡名	種類	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
大谷上ノ原 (5次調査)	集落跡	旧石器時代 縄文時代	旧石器ブロック(1) 土坑(8)	旧石器 縄文土器	ローム質土最上層のⅤ層から後期旧石器時代後半期に属する石製造物が計24点出土した。この内、14点の石製造物がまとめて分布しており、やや散漫ではあるが6号ブロックと認定した。このほかの10点の石製造物についても、ほぼ同じ層から出土しており、同一石器群と捉えている。			
要約	大谷上ノ原遺跡は、福島県双葉郡を代表する旧石器時代遺跡で、楢葉町でも最大規模の遺跡の一つである。木戸川を望む段丘面上に位置し、常磐自動車道建設に伴う調査が過去4回にわたり実施された。これまで、本遺跡では計665点の後期旧石器時代に属する石製造物が出土しているが、これらは刃部磨製石斧を伴う石器群と、小坂型彫器を伴う石器群、さらに尖頭器を伴う石器群として捉えられてきた。							
	今回、5次調査で見つかった石器群は、切出形ナイフ形石器を組成することから、後期旧石器時代後半期のAT降灰直後の石器群(立川ロームV層~IV層下部段階)と考えられる。つまり、本遺跡では、刃部磨製石斧を伴う石器群と小坂型彫器を伴う石器群の間に位置付けられる。また、本石器群は石材組成においても遠隔地石材である珪質頁岩のほかに、在地系石材である流紋岩やメノウ系石材やチャートなど多様である。こうした石器組成・石材組成のあり方は、AT降灰直後の開削東側の石器群に特徴的にみられる。							

\* 評価度数値は世界面地系(面地成年2011)による。

福島県文化財調査報告書第520集

## 常磐自動車道遺跡調査報告73

### 大谷上ノ原遺跡（5次調査）

平成29年3月24日発行

編 集	公益財団法人福島県文化振興財団 遺跡調査部	
発 行	福島県教育委員会	(〒960-8688) 福島市杉妻町2-16
	公益財団法人福島県文化振興財団	(〒960-8116) 福島市春日町5-54
印 刷	東日本高速道路株式会社東北支社いわき工事事務所 株式会社山川印刷所	(〒970-0101) いわき市下神谷字仲田100 (〒960-2153) 福島市庄野字清水尻1-10